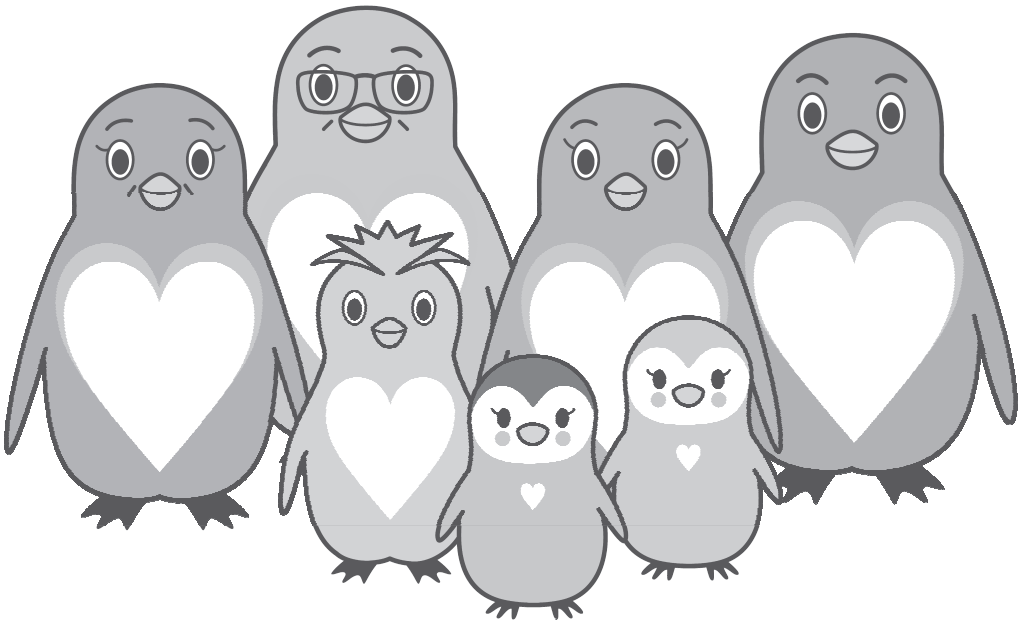
養育家庭（里親）体験発表集
（令和５年度）



東京都里親制度普及啓発キャラクター

「さとぺん・ファミリー」

東京都福祉局子供・子育て支援部

「養育家庭（里親）体験発表集」の発行に当たって

都内には、様々な理由により親元で暮らすことのできない子供が約 4,000 人います。そのような子供を、自らの家庭に迎え入れ、家庭と同様の環境で育てているのが「里親」であり、東京都ではその制度の普及に取り組んでいます。「養育家庭」は里親制度の一つであり、養子縁組を目的とせず、一定期間子供を育てる家庭です。

毎年、東京都は各区市町村と協力し、都内各地で養育家庭（里親）体験発表会を開催しています。この冊子は、令和５年度に開催された体験発表会において、養育家庭（里親）の皆さんに発表していただいた内容を要約し、冊子にまとめたものです。

養育家庭（里親）になろうと思ったきっかけ、児童の委託されていた時の思い、交流・委託中等の思いがけない出来事や慌ただしい日々の様子などが描かれています。

また、委託後の子供の赤ちゃん返りや試し行動などの問題や実子と委託児童の関係、子供を途中から育てることゆえの悩みについても語られています。

しかし、そういった御苦労の中にも、子供が少しずつ家庭になじんで心が通じ合っていくのが実感でき、養育家庭（里親）をやっていて良かったという話や、悩んだ時に養育家庭（里親）仲間や児童相談所の職員など周りの人から支えてもらった話など、養育家庭（里親）だからこそ味わえる子育ての素晴らしさにも触れています。

より多くの都民の皆様にお読みいただき、都内における養育家庭（里親）に対する理解を深めていただく契機になれば幸いです。

令和６年９月

東京都福祉局子供・子育て支援部育成支援課長

岡　本　　香　織

目　　次

１　手を離さなくてよかった・・・・・・・・・・・・・・・・　２

２　私の２２年間　～児童養護施設から現在～・・・・・・・　６

３　実の兄妹を受託して・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８

４　つながりを大切に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２

５　第二の人生で初めての子育て・・・・・・・・・・・・・　１５

６　里親としての覚悟・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１８

７　只今、任務遂行中・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２２

８　Ｏちゃんと里母さんとの強いつながりを感じた日・・　２６

９　この世に生まれて良かったと感じてもらうために・・　３０

１０　乳児院から我が家へ

　　２歳の子が色んな気持ちを乗り越えて・・・・・・・　３４

１１　里子との日々の暮らしの中で・・・・・・・・・・・・　３８

１２　我が家のちび姫～もう一度子育て、自分育て・・・・　４１

１３　広がれ！養育家庭！（我が家の場合）　・・・・・・・　４５

１４　あるがままを、そのまま受け入れて・・・・・・・・・　４９

巻末資料　体験発表会アンケート結果・・・・・・・・・・・　５３

養育家庭（里親）体験発表会へようこそ！

この度は、体験発表集を手に取っていただき、ありがとうございます。

本書は、令和５年度の養育家庭（里親）体験発表会の発表者の方々のご協力のもと、当日の発表内容を要約し、編集したものです。

より多くの方々に、里親制度を知っていただき、ご理解と共感を得られることを、何よりも願っています。

それでは、里親さんと子供たちの生活の一部をご覧ください。

１「手を離さなくてよかった」

発表者：里親（６０代女性）

家族構成：里親、実子５名（自立）、元委託児童２名（自立）

里親歴：１９年

里親になるきっかけは、「子供を守る大人になりたい」と思ったからです。

小学校２年生の時に住んでいた町には児童養護施設があり、どの教室にも施設から通学している子供がいました。その子たちの話を聞いていると、「家に帰っても先生と呼ぶ人がいる。消しゴムを買ってもらうには、今持っているものを使い切らないといけない。」という話をいつもしていて、家に帰ってもあまり休まらなくて大変だなと、子供心に感じていました。

同じ小学校で教師をしていた父のクラスにも、児童養護施設から通学している子供がいました。その子は交通事故で障害を持っていたので、勉強が大変遅れており、卒業まであと５か月というところで養護学校に転校させられたと聞きました。大人から見れば妥当な判断だったのかもしれませんが、幼い私には、どうしてクラスメイトと一緒に過ごすことができなかったのかと、思いがふつふつと湧き上がりました。

私は大人になり、家庭支援センターの協力家庭に応募しました。その際、養育家庭体験発表会のご案内をいただきましたが、出席したら養育家庭を引き受けてしまいそうだったので躊躇していました。しかし、里親をテーマにした「ぶどうの木」というドラマを見て、大変ではあるけれど必要な働きであると感じました。

そして、一緒に見ていた娘の「私も妹が欲しいな」と言った言葉に押し出されて、養育体験発表会に出席し、その後、養育家庭として申請・認定されました。

半年がたった頃、当時５歳の女の子が紹介されて、夫と二人で会いに行きました。私たちのことを受け入れてくれましたが、その日はほとんど会話をすることもなく、問いかけに対して、一言、二言返ってくる程度の会話しか成り立ちませんでした。

やがて、お泊まりという段階になったとき、行き渋りが激しくなって、迎えに行っても１時間以上、施設の玄関で待たされたり、次の日出直したりといったことが続きました。その状態で、無理に私たちの家に連れてきてもよいものかと、夫と何度も話し合いました。しかし、ここで断ったら、私たちには次の子供が紹介されるかもしれないけれど、この子は家庭に行く機会が奪われてしまうかもしれないと思い、私たちが待つべきだという結論に達しました。そして、交流を続けていた２月の終わりに、半ば強引に我が家に連れてき

て以来、彼女は私たちの家族の一員になりました。

ただ、赤ちゃんの頃から施設で過ごしてきた彼女には知らないことが多過ぎて、初めてのことには極度の不安を示しました。幼稚園の卒園アルバムに載せる写真を撮るときも、写真屋さんに入るまで十数分かかり、入ってからも、「何するの、何するの」と言い続ける具合です。小学校に入学しても、「鉄橋って何？」「ヨットって何？」と、言葉の一つ一つを教えないと宿題が進まなくて、私か夫が毎日２時間勉強を見るという日が２年ほど続きました。

彼女にとって、たった一人で全く想像のつかない家庭、地域の中に飛び込むことはどんなに不安なことだったでしょう。交流中の行き渋りも、今では理解することができます。

やがて、少しずつ我が家での生活にも慣れて、運動が得意な彼女はリレーの選手に選ばれたり、マラソン大会で上位に入ったり、学校でも徐々に自信を持って生活できるようになっていきました。

小学５年生になったとき、最も辛い時期がやってきました。それは、思春期を迎えつつあること、家のお金を持ち出したり、約束の時間に帰ってこない、習い事をサボるなどの問題行動が目立っていきました。何度叱っても、担任の先生と話し合って保護者会を開いてもらっても、児童相談所の方に来てもらって話をしてもらっても、彼女の行動が目に見えて変わることはありませんでした。もう私たちには無理かもしれないと何度も思い、夫とも毎晩のように話し合いました。

そんなとき、ふっと私の心に、「彼女は今までどれだけ裏切られてきたのだろう。待っても迎えに来てもらえない悲しみはどれほどだったのだろう。彼女が裏切られた分だけ私が裏切られたら何かが変わるかもしれない。だったら、幾らでも裏切られてみよう」という思いが湧いてきました。

何の根拠もない発想ですけれども、その日から彼女の行動が受け入れられるようになっていきました。もちろんよくない行動を放ってはおけないので、ぶつかり合いは続きましたけれども、私自身の心が軽くなっていったのを覚えています。

そして、中学２年生になった頃、お互いを苦しめた問題行動はなくなっていきました。彼女自身、大きな挫折を味わう中で、周りの人たちの支えを素直に受け入れ始めたことが、少しずつ彼女を成長させていったように思います。我が家に来た頃、鉄のように硬いと感じた彼女の心が、目に見えて柔らかくなっていくのを実感しました。

中学校卒業の日、体育館を退場していく彼女は、誰の目を気にすることなく、顔をくし

ゃくしゃにして泣いていました。小学校のときには見られなかった姿です。彼女の心の中に、大切だと思える人が住み始めた証拠です。

そして、学校で強制的に書かれたと言ってくれた彼女からの父母への手紙の中には、「これまで９年間育ててくれてありがとう。ここまでたくさん迷惑をかけてごめんなさい。私が小学校で失敗しても、中学校で失敗しても、里親宅から出て、違うところに行くと言っても離さないでいてくれてありがとう。お父さんとお母さんには感謝してもし切れないくらい感謝しています。これからは高校生となり、義務教育も終わって、自分で決めなければならないことがたくさんあります。不安で怖いけれど、私にはたくさんの味方がいるので頑張ります。いろいろなことにチャレンジして立派な大人になりたいです。私もいつかお父さんとお母さんのような家庭をつくりたいです」。

彼女が私をお母さんと呼び始めたときのことを、その手紙を読んで思い出しました。小学校１年生の夏休み明け、学校へ行くまで何かしら文句をつけて私を困らせる日が続いていました。話をしようと捕まえると、離せと泣き叫びます。

ある朝、私は、「私はあなたが立派な大人になるのを見届けるまで絶対にこの手を離さないから覚悟しなさい」と叫びました。その頃からです、私をお母さんと呼び始めたのは。彼女からの手紙を読んで、離さなくてよかったと、心から思いました。

高校、短大と進むにつれて精神的にも安定し、落ち着いた生活ができるようになっていきましたが、いざ就職となったとき、彼女の希望に沿った職場を見つけるのは困難を極めました。結局、卒業までに決まらず、思うように内定がもらえなくて、刺々しくなっていた時期もありましたが、「私は自分でちゃんとやるから口出ししないで」と宣言し、５月の連休明けに内定をいただくことができました。現在は、パソコン３台を抱えて営業事務の仕事に励んでいます。

並行して、彼女はこれまで１４年間、通称名として里親姓を使用してきましたが、今後もその名前を使いたいと、弁護士さんに助けていただきながら、氏変更の手続を進めていました。どちらも一人で頑張り、同じ時期に決定したので、苦しんだ分、喜びも大きく、独り立ちするための自信にもつながったように感じます。あるときは、私がたくさんの洗濯物を残して出かけなければならなかったのですけれども、「お母さん大変だと思って」と、帰ったら全部のシーツやタオルを干してありました。また、私の目標の一つに、Ｚｏｏｍ会議を自分で招待して開くことができるというのがありましたが、私が覚えたことを忘れないように、彼女が私専用のマニュアルを作ってくれました。いつの間にか助けても

らうことのほうが多くなり、成長した姿を感慨深く感じています。１４年間育てさせてもらったことを、今は心から感謝しています。

現在、私は自分の年齢や親の介護などもあって、長期でお預かりするのは難しくなりましたが、一時保護と短期で、時々お子さんをお預かりしています。突然、全く知らない人の家に寝泊まりするストレスは計り知れないので、我が家にいる間は、できるだけ普段の生活に近づくものを取り入れて、リラックスしてほしいと思っています。

もし今、養育家庭を引き受けるかどうか、迷っておられる方がおられましたら、こうした短期の養育も必要とされていますので、まずは数日からでもぜひ前向きに検討していただけたらと願っております。

私は、里親としては本当に未熟でした。自分の中にこんなにも意地悪な性質が潜んでいたのかと愕然とした日もありましたが、ここまで来ることができたのは、周りの方々の理解と励ましがあったからです。乳幼児期からの愛情不足を埋めるのは困難だと諦めかける私に、励ましてくれた学校の先生方。また、事あるごとに言葉をかけ続け、私たちもあなたを応援していると示し続けてくれたＰＴＡのお友達や地域の方々。悩みを共有し合い、助け合ってきた里親さん仲間。里子がいなければ知り合うことのできなかった素敵な方々との出会いがあり、親子ともに本当に多くの方々に支えられ歩んできました。もし地域に里親子がいたら、何かしらの関わりを持って励ましていただけますとありがたいです。

１９年間の経験を通して、里子たちが求めているのは、ごくごく普通の家庭の中で、特別な存在ではなく、周りの人と同じように安心して生活し、愛され、正当に評価され、希望を持って自分の人生を歩みたいということだと感じています。

初めて交流した日、ファミリーレストランで何をどう注文してよいか分からずに、「お姉ちゃんと一緒」としか言えなかった彼女が、今は自分が何を食べたいのか、何をしたいのか、どう考えるのか、きちんと自分の言葉で言い表すことができます。そして、人の思いを想像し、助けを必要とする人の傍らに寄り添うことのできる人となりました。

私が里親をしていて一番嬉しかったのは、彼女が高校生になってから心理の先生と面接をした後に、「この子の中にどっしりとした土台のようなものを感じる」と言われたときです。彼女がこの社会の中でしっかり根を張り、自分で歩いていける力をつけたと思えたからです。そんなふうに社会との橋渡しをし、安心して自分の道を歩いていってよいのだと背中を押してあげるのが、私たち里親の役割なのだと今は思っています。そして、私たちの家庭が、これからも心を癒していける場所であってほしいと願っています。

２「私の２２年間　～児童養護施設から現在～」

発表者：元委託児童（自立）／里親宅で過ごした期間：小学３年～高校３年
家族構成（当時）：里親、委託児童（複数名）

【里子】

私が里親家庭で育ったことに関する体験談を話していきたいと思います。

私は３歳のときから児童養護施設で暮らしていました。里親家庭で暮らすことになったのが小学校入ってすぐのときです。最初はフレンドホームといった形で、夏休みと冬休みの、小学校が長期間の休みに入るときに、里親さんの家庭に３泊から４泊泊まりに行くようなことが続いて、私の記憶だと小学校２年生辺りに、里親家庭で暮らすのはどうかという提案をされました。当時はまだ小学校２年生で幼かったので、児童養護施設の職員と、里親さんと、児童相談所の方と私で相談しながら、小学校３年生になってすぐに里親さんの家で暮らすということを決断しました。

里親家庭に初めて来たときは、既に兄弟とか一緒に暮らしている人がたくさんいて、一番小さくても中学校１年生か２年生という大きい子供たちがいる中で、小学校３年生のまだまだ幼い私が入る形で、里親生活が始まりました。一番年が近かったのも四つ上の兄でしたが、小学校から帰ってきたら兄と一緒に遊ぶというのが日課でした。

そんな小学校時代、中学校時代を送った後、高校生のときに母が体調を崩してしまって、家事を兄弟でやるということになりました。中学校時代に料理とかはよくやっていたということもありましたし、家族も多かったので、私は主に夕飯の準備や洗濯物を中心に行いました。当時は３個下に二人の弟と妹がいたので、弟と妹にも夕飯の片づけとかお皿洗いとかを任せて、洗濯物も各自やってもらいながら進めていた状況でした。

高校３年生辺りになってからコロナが流行し、自粛で学校が休みになったこともあり、家族との会話というのがどんどん増えていき、ものすごい楽しい高校時代を送ることができました。

里親家庭を出る前に、児童相談所とつながっているうちに、実の親に会いたいという話をしたことがありました。実の母親は元気に暮らしているということは分かっていて、会いたいという気持ちもありました。コロナ等、さまざまなことが重なり、延期がずっと続いていましたが、里親家庭を出る本当に直前にやっと会うことができて、本当にうれしかったというのと同時に、実の母親の口から血縁関係のある家族がいるということを教えてもらうことができて、本当にうれしかったです。

また今度、いつ会えるかも分からないですし、現在の仕事も始めてまだ数か月しかたっていないので、金銭的に余裕ができたら会いに行こうかなと考えています。実の親とも話すことができて、とてもいい里親生活を送ることができました。

里親家庭を出てからも１週間に１回は里親家庭の家族に会いに行って、当時高校生だった弟と妹と、高校生活や部活はどうかと話をしたり、自身の専門学校の話をしたりと、家族との会話を楽しみました。里親家庭を出てからも、家族との交流というのはものすごく大事にしていました。

今年の３月、私が専門学校を卒業したタイミングで、一番下の弟と妹が措置解除になり、里親さんも里親登録を辞めました。最近も、おとどい会いに行ってきたところでして、里親家庭なので血のつながりのない家族ですが、本当に実の家族のように接してくれて本当にうれしかったし、どこかで親孝行ができればいいなと思いながら生活をしています。

最後に、里親さんになりたいと思っている方々にひとこと伝えるとしたら、里子として委託される子供たちは、本当にいろんな状況下で来るので、まず、私はあなたの味方だよというふうに伝えるのが大事だと思います。子供に優しくしてあげてください。

３「実の兄妹を受託して」

発表者：里父・里母（４０代男性、５０代女性）

家族構成：里親、委託児童（（当時）小学３年の男の子、５歳の女の子）

里親歴：６年

【里父】

私たちは、２０１８年に里親登録をしている共働きの夫婦です。委託児童は２０２０年に受託した、今小学校３年生の男の子と、翌年の２０２１年に受託した幼稚園の年中さんの女の子です。この上の子と下の子は血がつながっているのですけれども、生まれてから一度も会うことなく、別々の施設で育っていたので、我が家で初めて顔を合わせました。

我が家は私から里親をやってみないかと話しました。４０歳過ぎたぐらいに、何か一つ挑戦してみたいなと。もともと少し気になっていた里親制度というものを、年齢的にも、子供を受託するとしたら今だろうなというところがあって、ほかにも少しいろんなきっかけがあったんですけども、そこで思い立って、ちょっと妻にやってみないかという相談をしたのがきっかけになりますかね。

【里母】

今あったように、いきなり何の前触れもなく、里子を迎えてみないかという話だったんです。夫としては４０代、何かやってみようというきっかけがそれだったんでしょうけれども、私がそのとき考えていたのが、仕事としてもう一歩踏み込んだところまでやってみようかというところだったので、全然向いているベクトルが違ったんですよね。正直、本当に驚いて、当時は即答できなかったんですが、前向きに捉えてやってみようかという話になりました。

【里父】

初めて受託の話が来たのが、里親登録をしてからちょうど１年ぐらいかな。

【里母】

勤務中に児童相談所から、相談したいお子さんがいますと電話がありました。当時４歳の男の子で、ちょっと発達に特性があるという話はありました。成長がゆっくりで、将来的に養育が必要なお子さんですが、可能であればお会いしませんかと。また、そのときに今０歳の妹もいて、できれば将来的に一緒に受託してほしいと一気に二人の話が来たんですよね。その後、施設に会いに行ったんですけれども、よく話に聞いたのが、ギャン泣きされるとか、一言も目を合わせないとかだったんですが、この男の子はにこにこ、にこに

こしていて、すぐ膝の上に乗ってくれて。正直、私は本当にこの子うちに来るのかなと違和感だらけ。でもかわいいなというイメージがありましたね。

【里父】

妻と一緒に会いに行ったときは本当にこにこして、かわいらしい感じでした。

【里母】

受託に向けた準備としては、小児科探しとか、どこで遊べるのかとか、そういうところを探しました。服とかどうするんだろうと施設の方に聞いたときに、必要なものはまたお渡ししますということだったんです。私のほうで幾つか衣料とかも用意していたのですが、ほとんど買う必要がないくらい施設で使っていたものをいただいて、そういうものを参考にして、足していくような感じでした。

あとは休職期間中に、幼稚園もしくは保育園を探していくわけなんですが、保育園はまず４歳の男の子が入れるところがなくて、近くに７時半から１８時半まで預かってくださる幼稚園があり、そこに電話したところ、すぐオーケーですよとのことでした。その幼稚園は、里子さんを何件か預かっていたケースがあったので、安心して預けられました。

【里父】

妹のほうは、その後１年ぐらいで受託したんですけども、私たち夫婦の里親としての目的は、やっぱり兄妹を我が家で会わせてあげたいなというところが一番最初にあったので、妹をようやく連れてきて、初めて我が家で会って、すごい緊張しながらお互い手をつないでいたんですけど、そのときは本当に、ああ、ようやく会わせてあげられたなという嬉しさがありましたね。ここからスタートだなという気持ちも、そのときに持ちました。

【里母】

本当に、妹との交流がやっと始まって何がうれしかったかというと、兄妹一緒に会わせられたことがうれしかったです。

【里父】

うれしかったこともあるんですけど、やっぱり大変なことも結構ありまして、一番大変だったのが、兄の発達面での特性が、結構強くて、主治医のところには定期的に通わせていたんですけども、薬を服用したほうがいいんじゃないかとアドバイスを受けました。

ただ、実親さんの許可を得ないと飲ませられない薬というのが一部あるんですよね。その薬を飲ませたほうが、本人のこれからの学習や成長にいい効果を出すだろうということでしたが、なかなかそれを飲ませてあげられませんでした。１年ぐらいかかったと思うん

ですけども、その間も児童相談所の方に実親さんと粘り強く交渉していただいたりとか、学校の先生とか、あとは里親支援専門相談員さんとか、そういった方々みんなで集まって、最終的には実親さんの承諾は得られなかったんですけども、そこでも何とかして飲ませる方法を検討して、服薬にこぎつけることができました。

それによって、本人も特性が少し和らいですごく楽になったような気もしますし、我々も本当に楽になったというところがあって。このエピソードは結構、今だと笑い話にできるんですけど、当初はやっぱりすごく大変だったんで、なかなか笑えない日々が続いていたというのもありましたね。

【里母】

私たちにはない天才的な、天性のものというのを感じるものがありまして、やっぱりお兄ちゃんには笑いの神がついているのかなと、私たちにはその要素はないなと。妹も天然の笑いの持ち主。予測しないことが常に起きるので本当に大変ですが、笑うしかないということがいっぱいありました。

そして、一番大変なのが兄の発達の特性で、友達とのトラブルでけがをさせてしまうことがあります。故意ではなく、水筒が友達の頭に当たっちゃって流血させてしまう等。それで、お母さんに謝りにいくのですが、必ず言っていただくことが、子供同士で解決しているなら心配しないでいいからと。お互いさまだからと。そういうふうに言っていただくことで、私はかなり救われています。

また、商店街の方々も皆さんすごくいい方々で、社会的養護というのも私もすごく心がけていて、共働きで家にいないことがあるので、何か困ったことがあったら必ず信用ある大人に頼ることと子供に言っています。近所の方々も常に気にかけてくださいまして、雷がひどかったときには、お兄ちゃんに、雷がすごくて怖かったんじゃないってお菓子を持ってきてくださったんですよ。そういうことを気軽にしてくださる方がいらっしゃって、もう本当に助かっています。

【里父】

多分商店街の方も、私たち夫婦にしばらく子供がいない時期をずっと見ていて、突然子供が来たので、何かそういうことをしているんだろうなというのを気づいてくださっている。その上ですぐ受け入れて、優しくしてくれたというのがすごくうれしかったですね。

【里父】

やっぱり兄と妹が自立したときに、力を合わせて暮らしていけるようにというのは、私

たちの一つの目標でいます。私は兄には妹にちゃんと優しくしなさいよと。妹には兄の言うことをちゃんと聞きなさいよというのを念仏のように、毎日言っています。

あと兄も妹も、以前生活していた施設の思い出とか、職員さんとの関わりをすごく大事にしているんですよね。なので、私たちも施設で体験した面白かったこと、楽しかったことは、一緒になって大事に考えていきたいと心がけています。

【里母】

とにかく私たちの下を離れても、自分たちだけで悩まないで、周りにとにかく助けを求めるということは、今からでもできるように教えています。

真実告知というのはまだ進んでいなくて、でも聞いてきたことに関しては真剣に、忙しくても手を止めて、答えられる範囲で答えて、詳しくは児童相談所の方々に話してもらうので、今度来たらそういう話を聞いてみよう。話を聞きに行ってみようかという話はしていますね。

子供は施設の方々、本当に大好きなんですね。一緒に大切な思い出を今でも話すようにはしていますね。それは大切にしています。

【里父】

そんなに偉そうなことは言えないと思うんですけど、私自身が大切に考えていることとしては、子供というのは、実のお父さんお母さんだけで育てていくものじゃなくて、社会全体で育てていくというところですね。

あとは人とか子供とかを育てていくのは、血のつながりというのも当然大事なんですけども、それだけじゃなくて、気持ちとか心とか、そういったところのつながりが大事だというのを私は信じて、里親というのを今続けていますので、もしそういったところの気持ちをお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ勇気を出して、一歩踏み出していただければなと思っております。

【里母】

この養育家庭の制度というのは、いろいろな関わり方ができて、私たちのように長期で見ますよというパターンもあれば、一時保護といった短期で見ていくということもできるんですね。そういうことではいろんな関わり方ができるので、もし興味があれば、この中で自分がやっていける、自分のパターンに合ったものを探して関わることができるのかなと思っていますので、ぜひ、がっつり構えないで参加してくださる方がいればと思います。

４「つながりを大切に」

発表者：実子（３０代女性）

家族構成：里親、委託児童（9歳女の子Ａちゃん）、委託児童（15歳女の子Ｂちゃん）

※インタビュー形式で、ご発表いただきました。

① 自己紹介（現在の家族構成、受託歴）をお願いします。

現在は両親と中学生の女の子と小学生の女の子と暮らしています。受託歴は十数年前からと聞いています。保育士をしています。

② ご両親が里親登録をされた際、ご自身は何歳でしたか？

私が２４歳の時に里親登録を聞きました。妹はその時中学生でした。

③ 里親登録の際にご両親から説明された内容や、ご自身が感じたことを教えてください。

元々里親というものを、私が産まれて大きくなるにつれて兄弟姉妹がいない世界で育ててしまうのはどうかと考えていた、ということから視野に入れていたということを聞きました。実際は妹が９歳下に産まれたので、少し現実とは遠ざかったようでしたが、姉妹二人とも大きくなり里親になりたいという母の気持ちは変わらなく、その気持ちを聞き母がやってみたいことならばやってほしいしできることがあるならやってみた方がいいと思いました。

④ これまでの委託児童や、紹介された時のご自身のお気持ちを教えてください。

里親登録を両親がしてから妹が自立するまでは、短期の子をお預かりしていた記憶があります。長期の子の委託児童の紹介は登録から4年後でした。初めてお預かりしたお子さんは高校生になる年齢の子でした。高校生になる子が我が家で3年間を過ごすということで、初めは3年間という時間が長いのか短いのかピンときませんでした。しかし縁があって我が家に来てくれるということであれば一緒に過ごして見たいと思いました。

⑤ 委託児童との生活の中で、嬉しかったことなどはありますか？

父の日、母の日、それぞれの誕生日など両親のためにみんなが集まってくれることです。私としては両親を大切にしてくれるということはどんなことよりも嬉しいことです。それぞれ違うところで過ごしていたとしても家族としてそうやって成り立っていけるということはなかなか体験できないことですし、心強い存在が増えていると思い日々そのことを嬉

しく思い噛み締めています。

⑥ 委託児童との生活の中で、戸惑ったり、つらかったことはありますか？

高齢児のお子さんをお預かりすると、どのように声をかけたらいいのかやどこまでその子と関わっていいのかということを戸惑い迷うことがありました。

そんな時は母に自分が感じていることを話したり、どんな風に伝えればいいのかということを相談しました。里子も実子も人間として生きてきていることは同じであるけれど生きてきた背景がそれぞれに違い抱えているものも違うなかで、相手を知るということは自分もさらけ出して楽しいことも失敗したことも交えながら話すことで、まずは、私という人間を知ってもらえるようにしました。

逆に小さい頃からお預かりした子は、初めすぐに受け入れてもらえず仲良くなりたいと思いながら距離があり戸惑いました。保育士もしているので少し自信を持っていたのがいけなかったかもしれないですが、なかなか打ち解けることができず模索しました。その子ともその子の年齢なりの心の開き方で、私もありのままを伝え少しずつ近づいていったような気がします。

⑦ 委託児童との生活の中で、印象的なエピソードを教えてください。

お預かりしている子たちがどんどん成長していることを実感できることが毎日印象に残ります。昨日はこうだったのに伝えたらすぐに吸収して自分のことを振り返ることができたり、相手を思いやる気持ちを自然に持つことができたりという姿を見て人間の成長はとても深く学ぶことが多いと実感します。自分の気持ちを表出できること、どんな出し方をしても自分のことを認めて受け入れてくれる存在があること、しっかり向き合って一緒に考えることこういうことの繰り返しで生きる意味の基盤をどんな相手とでも構築していけるのだと日々思います。

⑧ 里親をされている両親に対して、どのようなお気持ちを抱いていますか？

やりたいと思ったことを実現し人間形成に携わり色んな人の力になっている母、その母を受け入れ見守る父。二人のバランスが取れているからみんなを迎えることができるのでそんな二人を尊敬し人のためにと思って動けることがとてもすごいなと思います。里子さんはもちろんですが私や妹のことをおざなりにすることなくどんな時でも助けてくれて一

番心強い存在です(私は頼りすぎていますが)。だからこそ里子さんに対してや家族の中で今自分にできることがあるならばぜひやりたいと思うし、そこで学ぶことが自分の力にもなっていると感じます。

⑨ 委託児童は、ご自身にとってどのような存在ですか？

私の人生に関わってくれてありがとうと感謝しかない存在です。縁があってこうやって我が家に来てくれて私のことをお姉ちゃんとみんなが慕ってくれることはとても嬉しいし、私の力になっています。毎日お話をしたり料理をしたりたわいもないことですが同じ時間を過ごすことが私の中で今一番大切な時間です。

18歳の自立まで我が家にいたお子さんも、保育士になりたいと目指し今は同じ職場で働いています。お預かりした当初の高校生の時には深いところまで話せなかったことが多かったけれど、我が家との関わりを持ち続けてくれていることで今では私にとっては頼りになる存在です。

みんな私の家族のことを想ってくれているのが何より嬉しいし、こうやって戸籍など関係なく家族にもなれるし、家族っていいなと思います。なのでどんな方にも胸を張ってうちで過ごしている里子さんですと紹介することができます。

⑩ 実子と委託児童が一緒に生活する場合、どのような配慮があると良いと思いますか？

実子が幼い場合には相当な目配り心配りが大切になってくるのではないかと思います。ご両親の気持ちは見えないところで何分割にもされていることを子どもは感じます。その気持ちを感じさせないぐらい、表情の変化などもしっかり見ていくことでうまくいくのではないかと私は思います。実子も里子も同じだけれど同じではない、そこがとても難しいとは思います。成人している場合でも同じだと思います。何歳になっても実子なのです。やはり両親の愛をすべて受けたいという気持ちは本能的に残っています。そこは実子が犠牲にならないようにしっかりと守っていって欲しいと思います。その事が伝われば実子さんも気持ちに揺れがなく里子さんと関わることができ、それぞれが自分の気持ちを出しながら暮らし、ひずみやいがみ合いなどもなくやって行けるのではないかと思います。もともとがバラバラなピースが集まっているから同じ枠に入るのはそう簡単ではありません。それぞれのペースを大切にしながら一人一人と向き合ってゆっくり人との繋がりをつくっていけばいいのではないかなと私は思います。

５「第二の人生で初めての子育て」

発表者：里親（６０代女性）

家族構成：里親、委託児童（（当時）小学４年のＡちゃん）

里親歴：７年

私たち夫婦はずっと共働きで、日々お互いに仕事に没頭し、休みの日はゴルフや旅行など、好きな趣味を楽しむ生活をしていました。特に子供を持ちたいという強い思いはなかったので、そのまま授かることもなく、実子のいない夫婦となりました。

私が５０歳間近になる頃、里子を迎えた家族の話をテレビで見て、心に刺さるものがあり、その頃からずっと里親子という制度が気になり始めました。夫は子供にはほぼ関心がない様子でしたので、最初は、私もそんな思いを打ち明けることはしませんでした。

少しゆっくりしたい思いもあり、仕事を辞めて、近くにある児童養護施設でボランティアを始めました。子供たちのお弁当を作って遠足に行ったり、勉強したり、施設のイベントに参加したりと、今までとは全く違う生活が新鮮でとても楽しかったです。

施設に通うようになって２年ほどたってから、週末だけ子供を家に迎えるフレンドホームの話をいただきました。夫と話し合って、用事があるときは無理に付き合わなくていいよということで承諾してもらい、小学校２年生の男の子を、週末迎えることになりました。

家に来ると、男の子はうれしくて大はしゃぎ。付き合わなくてもいいなんてルールは通用せず、夫の名前を何度も呼んでなついてくれるものだから、かわいくて構わずにはいられない様子でした。内心私は、「よしよし」と思いながら、楽しい週末を過ごすようになりました。

ところが、数か月過ぎたある日、男の子は家庭復帰を前提とした実親さんとの交流が始まり、フレンドホームは突然終わってしまいました。私もすごく寂しい思いでしたが、夫のほうがかなりがっかりした様子でしたので、そのときから、それなら里子を迎えてみないかと、初めて里親制度の話をしました。

夫には、「他人の子供を育てるなんて、そんな責任重大ことはとても無理。そもそも年齢が行き過ぎていて、孫を迎えるようで子供がかわいそうだ」と言われました。確かにそのとき私は５０代半ばだし、夫は６０近い年齢でしたので、いろいろ心配はありましたけれど、第二の人生を子供と一緒に楽しく生活できたら、私たちも若々しく頑張れるし、自分だけを見守ってくれる大人を必要としている子がいるなら、我が家に迎えて、みんなで楽しく助け合って過ごせたらいいんじゃないかと、「やってみない？」と話し合っている

うちに、夫もフレンドホームで男の子と過ごした時間が思いのほか楽しかったこと、子供を迎えるイメージが何となくでき、心が動いたようでした。そして、研修を受けることにしました。

認定を受けてから３か月後、里子の紹介のお話をいただきました。さんざん、慎重に考えてから、と話し合っていた私たちでしたが、うれしくて思わず二つ返事でお受けすることにして、交流が始まりました。

Ａちゃんに会えるのを楽しみに、週４日、せっせと通うのですが、なかなか思うようになついてくれません。一緒に遊んでいても、最後は泣きながら大好きな担当保育士さんを探し始めます。みんなで行く公園散歩でも手をつないでくれません。そんなとき、とても切ない思いになって、私も泣きたくなりました。担当保育士さんは、「里母さん、里父さんのことを意識している証拠ですよ」と慰めてくれました。

考えてみたら当たり前のことですよね。こんな小さな子がママではない人と、なんだか分からないけれど、来れば長い時間ずっと一緒にいるんですから。楽しく過ごしていても、いつもいてくれる保育士さんがいない不安や寂しさが、時間がたつと、最後にどっと込み上げてくるのは、当たり前のことです。

泣きたくなるような気持ちにもなりましたが、この子がこのまま私たちと里親子になれなかったら、児童養護施設に行くことになるかもしれない、自分だけに愛情を注いでくれる唯一無二の存在が子供には必要だ、と強く思いました。お家で迎えることになるのか、施設に預けられるのか、この子の人生の大切な分かれ道です。だから、目の前のＡちゃんをどうしても家に迎えたいと願い、へこみまくる夫をなだめ、焦らず、忍耐強く構えることに決めました。多分、私がもっと若い頃だったら、ギブアップしていたと思います。「少々のことはしようがないね」と、のんびり考えられるのは年を重ねたおかげかも、と改めて気付かされました。

そして、結局、微妙になついたような、そうでもないようなまま、我が家に外泊することになりました。

最初は１泊、次は３泊、３度目は１週間ほどでした。我が家は自分のテリトリーではないせいか、借りてきた猫のように素直でおとなしく、乳児院で、やだやだとあんなに暴れていたのが嘘のように手もつないでくれるし、だっこもさせてくれます。

もしかしたら、仕方ないと観念したのかもしれませんが、見るもの全てが初めてだらけで、楽しくなってきた様子です。大丈夫かなと心配していたのは、取り越し苦労のようで

した。私のことも「大好き！」、夫のことも「大好き！」と言って、抱っこをせがむようにもなりました。今でも忘れられません。

３度目の外泊が終わって乳児院に戻ると、なかなか車から降りようとしなかったのです。下を向いたまま黙っています。職員の方が、「私とＡちゃんと２人で、少しお話をさせてください」とおっしゃったので、私たちは席を外しました。ほどなくして、職員の方が私たちのところにいらして、「Ａちゃんに、「里親さんのお家、楽しい？」と聞いたら、「うん」と言いましたよ。「このまま車から降りないで、里親さんのお家に戻りたい？」と聞いたら、「うん」と言いましたよ。」と伝えてくれました。そして、私と夫がＡちゃんのところに行って、「私たちのお家から幼稚園に行く？乳児院はたまにしか帰って来れないけれど、いいの？」と聞くと、「うん」とうなずきました。

私はうれしい気持ちと同時に、この子はこんなに小さいのに、自分が今決めなければいけないんだと、もしかしたら、大好きな乳児院にはずっといられないのではないかと、何となく状況を察して、決断をしているのだなと感じて、本当に、本当に胸が締めつけられるような、切ない気持ちになりました。今はまだ無理かもしれないけど、何年後かにきっと我が家に来てよかったと思ってもらいたい。あなたのこの決断を、私たちは必ず受け止めて支えていくよと強く思いました。

我が家に来てから７年間の第二章は、ますますいろいろなことがあり、もっともっとお話したいのですが、残念ながら１日あっても語り尽くせないので、今回は、ここまでにさせていただきます。

今の生活が本当に楽しいです。この年でママ友もできましたし、今どきの小学校生活に驚きながら、Ａちゃんと一緒に楽しんでいます。先日は夫とＡちゃんで原宿デートもしてきました。「こんなかわいい子と原宿デートできるおじいちゃん、なかなかいないんじゃない、幸せだね」なんて話したりしています。

今思えば、この年齢が私たちにとっての子育て適齢期だったのかもしれません。こんな生活を私たちにくれたＡちゃんに感謝です。

今どきは、私たちのように子供を持たない選択をするご夫婦や、独身の方が増えていますから、大いにご自分の人生を楽しんで、そして私たちのような年齢になってから、まだこんな選択もあるのよと知っていただけたらなと思います。

６「里親としての覚悟」

発表者：里親（３０代男性）

家族構成：里親、委託児童（（当時）小学２年のＫくん）

里親歴：５年

里親になったきっかけは、明確にこれというものはなかったと思います。夫婦共働きで割と自由に暮らしていた中で、実子には恵まれなかったのですが、やはり子供を育てたいという気持ちが大きくなっていき、私の方から里親をやってみようと切り出しました。

我々夫婦は東北の地方出身で、周りに身内はいない状況でした。その分、里親をやることで、仮に何かがあったとしても、親族に迷惑をかけることはないだろうと考えていました。さらに周囲の人が互いに干渉せず、いい意味で独立して生きている東京という環境も非常によかったと思います。

１日でも早く子供を育てたい気持ちが強かったこと、養子は自分たちの状況から１人を育てるのが精いっぱいだったと思いますが、里子であれば複数の子供を育てられるのではと考え、養育家庭の登録申請を行いました。

果たして肝心の子供が委託されてくるのだろうかということでしたが、登録後間もなくして当時３歳のＫくんが紹介され、委託に向けての交流が始まりました。交流初日はお互い何もしゃべることができず、ただただ同じ空間を共有しただけでした。

私の仕事がシフト制だったため、週３日ペースで施設に通いました。言うまでもなく、交流は毎回手探りの日々でした。Ｋくんとの距離も少しずつ縮まってくると、Ｋくんも少しずつ話し出すようになり、Ｋくんの言動の一つ一つが気になって、帰り道は夫婦での反省会の話題が尽きることはありませんでした。

１か月が経過した頃に、施設から、Ｋくんは交流がある日は朝からインターホンの前で待機して、インターホンが鳴るたびに「来た？」と聞いてくるんですよという話を聞きました。初めて我々のことをどう思っているのかを知ることができ、嬉しかったです。

その後も交流、外出と進み、外泊は１泊、２泊、一週間と期間が延びていき、長期外泊から委託という流れになります。外泊期間に入った頃に最も印象に残っているのが妻の変化です。里親をやることは私が言い出したこともあり、勢いという面だけでは私のほうが引っ張ってきたという謎の自負もあったと思います。しかし外泊が始まると、自分が引っ張ってきたという愚かな勘違いに気づくと同時に、妻の変化と偉大さに打ちのめされました。きっかけは窓の網戸に、窓からの転落防止のための窓ストッパーを発見したときでし

た。そこで家の中を見回してみると、知らないうちに外泊中に着るであろう衣類や子供用の便座、食器類が揃っていました。委託されてからの生活を具体的に考え、行動していなければできないことです。交流中のようにただＫくんと楽しく過ごしているだけではだめな時期に移行してきているんだと、私自身の意識を変える大きなきっかけにもなりました。

外泊期間中は、食事や入浴も大きな問題はなく、夜泣き等もありませんでした。ただ毎回、外泊の最終日になると「帰りたくない。ずっとこの家にいたい。」と言って駄々をこね、それを振り切って施設に帰っていくのが一番辛かったです。

出会いから約７か月の交流期間を経て、正式に委託措置となりました。ただＫくんにとっては、外泊や委託という言葉上の区切りはないので、外泊期間中と同じように、「ここが僕の新しいおうち。ずっとこのおうちにいていいの。」と何度も聞かれました。

小さい子を長期に受託される場合は、子供とじっくり向き合う時間を設けることをお勧めします。我々の場合は里親登録をするに当たって、妻が仕事を辞め、里親に専念できる状態にしました。幼稚園に入園するまでの半年間は、施設の生活から外の生活に慣れていく期間であり、３人でじっくり時間をかけて過ごしました。

委託生活も２～３か月が経つ頃には、施設に戻ることはないだろうと頭では分かっていても、「この二人は、本当に自分と一緒にいてくれるのだろうか。」という気持ちが根底にあったと思います。そういった意味では順調に、いわゆる試し行動が始まりました。

我々の夫婦の意識がＫくんに向いているときは何事もないのですが、少しでも自分に意識が向いてないと感じると、「見て」と言いながら部屋の中でわざと床におしっこをする、お店の床に寝転ぶといった状態でした。それと並行して「お母さんはどこから来たの。お父さんはどこから来たの。」という質問をするようにもなりました。これはもしかして真実告知のタイミングが来たのかもと思い、できるだけ正確に我々のルーツを答えるようにしました。このやり取りを繰り返していたある日、妻が「じゃあ、Ｋくんはどこから来たの。」と尋ねてみました。すると「バスに乗って、電車に乗って歩いてきたんだよ。」と、別の日には「ロケットに乗って飛んできたんだよ。」など、日によって答えは違いました。

日を改めて設け、「Ｋくんは○○さんという人から生まれたんだよ。今一緒にいるのは、Ｓお母さんだけど、あなたを生んでくれた○○さんも、Ｋくんのお母さんなんだよ。」と説明をしました。どこまで理解してくれたかは分かりませんが、真実告知は何度も何度もごまかさずに繰り返しました。次第に「僕はお母さんが二人だね、すごいね。」などと言葉にしていたので、少しずつ自分の中に落とし込んでいたのかもしれません。その質問も

徐々に言わなくなっていきました。試し行動や真実告知のこともあり、委託後の生活で心がけることの中心は、１日でも早く、この家が、Ｋくんが安心して暮らしてよい家であるということを感じてほしい、ということでした。

そして、幼稚園に通い始めるまでの半年の間に、日常生活でできることを少しずつ増やしていきました。トイレトレーニングや食事、着替えなど、楽しく進んで練習できるよう、好きなキャラクターが描いてある表を作ったりして、工夫を凝らしました。スプーンで食べ散らかしていたのが箸で食べられるようになったり、トイレも自分で行けるようになり、着替えも自分で用意していけるようになっていました。いよいよ幼稚園に通い始めました。行き渋りもなく通い始めましたが、「今日は幼稚園どうだった？」と聞いても、好んで話そうとはしませんでした。入園して１か月ぐらいがたった頃に音楽発表会がありました。ある程度は、みんなと同じようにやるのかなと淡い期待を持っていたのですが、スタートから動き回ったり、床に寝転がったりしており、それを機に、以前から薄々感じていたＫくんの発達面に関する違和感と本格的に向き合い始めることになりました。

幸いその頃になると、里親子のコミュニティーとのつながりや、児童相談所の協力もあり、夫婦だけで抱え込むこともなく、発展的に捉えられるようになっていました。

現在は小学２年生となり、自閉症情緒障害の支援学級に通っています。同じような課題を持った子供同士で、日々トラブルがありつつも、楽しそうに毎日学校に通っています。

日々の成長も目まぐるしく、我々の言うことを何でも素直に聞いていたのが、最近は反抗してくることも増えました。手をつながないと外を歩くこともできなかったのが、近くの塾に一人で歩いて通えるようになったり、自分のお小遣いと相談しながら近くのスーパーに買い物に行ったりと、思いもよらないところで急に成長しています。

このまま順調に進み１８歳で措置解除になる場合、あと１０年で自立していかなければなりません。我が家から巣立ってうまくやっていけるのかなと、１０年後に向けて不安になっていたときに、生まれた頃から脳性麻痺の障害がある東京大学准教授熊谷晋一郎さんの「本当の自立とは依存先を増やしていくことである。」という言葉に出会いました。

熊谷さんは大学に進学するまでは、依存できるのは親しかおらず、親を失えば生きていけないのではという不安が拭えなかったそうです。しかし、大学進学を機に一人暮らしを始めたことで、社会というものが案外優しい場所であることに気づき、依存できる先を増やしていけば「自分は生きていける、自立できるんだ。」ということが分かったそうです。

一般的に自立とは、周りに依存しなくなることだと思われがちです。しかしそうではな

く、依存先を増やしていくことこそが本当の自立であると。これは障害の有無に関わらず、全ての人に通じる普遍的なことだと記事でおっしゃっていました。

果たして、１０年後にＫくんは大学に通っているのか、働いているのか、それは分かりませんが、自分でお金を稼いで生きていけるよう、これからも全力でサポートしていきたいですし、依存先を増やす手助けも積極的に行っていきたいです。

最後に里親となり４年以上たった上での生活の変化、考えや思いの変化を述べたいと思います。里子が委託されたことで、大人中心の生活から一気に子供中心の生活に変わりました。生活サイクルや出かける場所、休日の過ごし方など、大人だけの生活と同じようにいかないことは増えましたが、それは決してネガティブなことばかりではなく、子供がいることでしか経験できないこと、楽しいことや幸せな時間もたくさん経験しています。

里親として生活を続けていく中で、自分たちの里親制度についての考えや里親としての姿勢も、登録した頃に比べて日々変化しました。

現在社会では、施設ではなく里親委託が推奨されています。しかし、今後も自分たち夫婦が里親を続けていく上では、里親委託がさも当たり前のようにベストな選択とは考えないようにしています。もしかしたら、施設にいたままのほうが幸せだったのではないかと、僅かにでも里子に思わせないような接し方、この里親と暮らしていて本当に幸せだなと、里子が心から感じられる接し方というものが、里親は求められて然るべきだと思います。

子供の立場になって考えてみれば、大人の都合で施設に預けられ、見ず知らずの里親に紹介され、委託されていきます。子供ができることは、委託を受け入れるか、「絶対にこの里親は嫌だ。」という意思表示をすることくらいだと思います。委託が決まってしまえば、里親に人生を委ねてみるしかありません。

そういった意味では、里親は大人の都合の最後の砦になるわけなので、人生を委ねてきたその子供たちに里親自身も人生をかけて応えてあげるのが、最低限にして、唯一の態度、在り方なのではないかと思うようにもなりました。

里親をやってみて、全てがプラスに転じるわけではありませんが、トータルでは本当に間違いなく、いい方向へ大きく変化したと思います。後悔などは一切なく、やってみて本当によかったなという気持ちしかありません。

里親をやってみようか迷われている方へのメッセージとしては、里親として、委託されてくる子供にできる限りの愛情を注ぐ、人生を背負い込むという覚悟さえ固まっていれば、あとは実際にやってみるしかないと思います。

７「只今、任務遂行中」

発表者：里親（５０代女性）

家族構成：里親、委託児童（７歳男の子Ｔくん）

里親歴：５年

現在、夫と小学２年生で７歳になる里子のＴ君と猫２匹で暮らしています。Ｔ君は２歳半のときに長期委託で乳児院から我が家にきました。ポケモン、ゲーム、ポテトチップス、おしゃべりが大好きで甘えん坊、そんなＴ君と共に生活をはじめて５年目になります。

里親に関心をもったきっかけは、実子がいないこと、子供の虐待などのニュースが多くあること、住んでいた家の近くで里親募集の張り紙を見かけたことなどでした。

家庭を必要としている子どもがいるのであれば、自分たちにも何かできることがあるのではないか。子どもを育ててみたいと思う気持ちが大きくなり、夫に相談をしました。そして、児童相談所に電話をし、その後研修を終えて 2017 年 11 月に養育家庭に登録となりました。翌年の１月に児童相談所から連絡があり、初めて子どもの紹介をされました。その子が現在一緒に暮らしているＴ君です。児童相談所の職員からＴ君の今までの経緯や、母親・親族の状況などの簡単な説明を聞き、養育家庭候補にエントリーするかどうか、考える時間が２週間ほどありました。夫と話をし、エントリーしたい気持ちでいっぱいになりましたが、Ｔ君には食物アレルギーがありました。自宅には猫が２匹おり、アレルギー体質のＴ君には、よくない環境であると思いましたが、エントリーすることにしました。約３週間後に養育家庭候補一番となったとの連絡を受け、家庭訪問や乳児院に書類などを送ったりしているうちに、乳児院へ行く日が決まりました。初回は児童相談所の職員、乳児院職員などたくさんの職員との会議のようなものがあり、とても緊張しました。そのあと、Ｔ君に面会するためにＴ君が遊んでいる部屋に向かいました。私と夫が部屋に入るとＴ君は逃げるように職員の膝に座り、怯えるような目でこちらを見ていました。Ｔ君と距離を置きながら話しかけ、遊んでいたミニカーで少し遊び、その日は帰宅しました。４月に入り本格的な交流がスタートしました。交流前に乳児院の担当職員から、子どもたちとどのように関わっているか、などの話を聞きました。子どもの不安が大きくならないように関係性を積み上げていくことが必要であり、色々な職種が関わりながら、チームで子どもの成長をみていることなどの説明を受け、一人ひとり丁寧に関わり合いをもち、育てていることがよくわかりました。そんな大事に育てられているＴ君が、私たち夫婦に懐いてくれるのかとても不安でしたが、「自分のためにきてくれる特別な人であると、ちゃんと

わかるようになるので大丈夫です」と担当の方が話をしてくれました。交流の進め方も詳しく説明があり、Ｔ君の反応や、私たちの疲労具合などを確認しながら、交流の頻度を調整してくれました。乳児院での交流は、個室が準備されており、そこでお絵かきやスタンプなどの遊びを一緒にしてＴ君と過ごしました。担当の職員さんが、Ｔ君がどんな遊びが好きなのか、どのように接したらよいのか、などその都度分かりやすくアドバイスしてくれました。食事のあとに片づけられたスプーンが欲しくて大泣きし、しばらく泣き止まない事がありました。５回目の交流時に同じ部屋の子どもさんが私を見て「Ｔ君のママだ」と叫んでいました。私はその言葉にびっくりしました。交流の様子を子どもたちはよく観察しているんだなと感じました。Ｔ君も今までそのような場面を何度も見てきていたのかな、と少し複雑な気持ちになりました。

交流を重ね、Ｔ君との関係性ができたところで、自宅への外出となりました。初めての場所でも安心して楽しく過ごせるようにと、乳児院で使っていた物と同じクレヨンや、食器、好きな絵本などを準備しました。外出することは職員の方からＴ君に伝えられてはいましたが、いつもと違う様子を察し、準備をしている段階でグズりだし、玄関を出るときには抱っこしている体を反らし大泣きしていました。乳児院の方も同行してくれましたが、駅の改札を通ろうとすると響き渡る声で泣き続け、気持ちを落ち着かせるため、駅の周りを歩いて一周しましたが状況は変わらず、Ｔ君は泣き叫びながら改札を通りました。

外出、外泊、そして長期外泊の翌日からＴ君の顔に赤い発疹が出始め、翌日には 39 度の発熱、夜も寝ぐずりが強く、慣れない環境で過ごす時間はとてもストレスになっていたのだろうと思います。部屋の中では「抱っこして、抱っこして」と慣れない空間に不安感が強い様子で、別の部屋に一人では移動できずに抱っこして移動していました。風呂場も「怖い、怖い」と泣いているため、電球を明るいものに取り換え、目線に合わせて好きなキャラクターの絵を張ったりしました。昼間は１時間以上散歩をし、公園で遊んだりしましたが、寝つきが悪いうえに寝相も悪く、しばらくの間睡眠不足の状態が続きました。乳児院ではなんでも食べていると聞いていましたが、我が家では偏食がひどく、食事の準備に悩まされました。便秘もひどく、下剤や整腸剤、ときには浣腸を使用してなんとか毎日排便させなくてはと必死でした。そんな状態ではありましたが、三人で一緒にご飯を食べていると「おとうちゃん、おかあちゃん」とＴ君は何度も、交互に夫と私の顔を見ながらニコニコし話しかけてくる姿をみているうちに、そんなに必死にならなくてもいいのかなと思いました。

Ｔ君との生活がスタートしてから、里親支援専門相談員さんが定期的に家庭訪問してくださり、普段の生活の様子や困っていること、心配なことなど聞いてくれました。「Ｔ君への関わり方はこのままで大丈夫ですよ」と声をかけてもらうと不安な気持ちがとても楽になったことを思い出します。Ｔ君との生活が始まってから８か月が過ぎ、３歳になったＴ君は幼稚園に入園しました。「Ｔ君はこだわりが強い子なので、新しい環境になれるまでに時間がかかるかもしれませんね」と、乳児院の方から言われていたので、大変だろうなと覚悟していました。お試し保育ではずっと元気な声で泣いており、別室に連れていかれたり、制服の試着も泣いて嫌がり殆ど試着できませんでした。入園してから３日間は教室の窓にへばりつき泣いていましたが、それ以降は泣くこともなく、手のかかる園児だったようですが、幼稚園生活を楽しんでいました。幼稚園で知り合った、何人かのママ友にはＴ君が里子であることを伝えていました。里子と知ってＴ君がかわいそうな子だとか、友達とトラブルになったときに、里子だからなどと言われるのではないか、と少し考えましたが、伝えておくことで日常の会話で気を遣わず話ができ、Ｔ君を通して里子の存在や現状を知ってもらう機会にもなり、里親制度や養育家庭というものを身近に感じてもらうことができるのではないかと思いました。実際に、里子と養子縁組は同じと認識されている人も多く、養育家庭をしている人と初めて話をした、などという声を何度か聴きました。

年中頃から少しずつ真実告知をしていきました。乳児院から預かっていたアルバムをみながらＴ君がどこで生活し、どんな遊びをしていたかなど、写真をみながら話をしました。アルバムはいつでも見られるようにＴ君の手の届く場所に置き、一人でアルバムを眺めているときもありました。年長になるころには、Ｔ君を産んでくれたお母さんがいること、乳児院で育ててくれた先生がいて、今のお母さんがいることを伝えました。Ｔ君からは「ふ～んそうなんだ」と軽い反応がかえってきました。乳児院にも一緒に行き、Ｔ君を知っていてくれる職員の方がたくさん声をかけてくれていましたが、恥ずかしいようで、声も出さず１時間ほど経過してから、いつものテンションで遊んでいました。真実告知をすることで、Ｔ君の気持ちが不安定になるのではないかと心配になり、事前に幼稚園の担任の先生に伝えていましたが、幼稚園ではいつもと変わらない様子で過ごしていたようです。

幼稚園は通称名で通っていましたが、小学校入学前にＴ君に実名のことを伝え、通称名か実名どちらで小学校に通うかを本人に選択してもらいました。小学校になると急に発語もしっかりし、同時に反発する言動も多くなってきました。成長してるぞと感心すると同時に、真実告知を進めなければと感じていました。寝る前にＴ君と布団の中で話をしてい

ると「お母さんはあと何年で死んじゃうの？ぼくはあと何年生きるの？ずっとお母さんと、お父さんと一緒にいたい。ぼく一人になっちゃうの？ぼく一人じゃ何もできないからどうしたらいいの？」と、急に不安になってしまった様子でした。Ｔ君は一人ではないこと、困ったときにはいろいろな人がちゃんと助けてくれること、Ｔ君がいろんなことが一人でできるように、これから少しずつ色々教えていくから大丈夫だよ。と話をしました。

家にはパンチとキックという名前の猫がいます。ある日、Ｔ君に「なんでパンチを飼ってるの？なんでキックを飼ってるの？」と聞かれ、２匹の猫を家で飼うことになった経緯を説明し終わると「ぼくはどうしてお母さんとお父さんとすんでるの？」と聞いてきました。Ｔ君には養育家庭になろうと思ったところから一通り説明すると、「お母さんの任務はなんなの？」とまた聞かれました。任務という言葉はゲームやテレビからの知識なのですが、すごい質問だと思いました。ここは真剣に伝えなければいけないと思い「Ｔ君にとって安全な場所、安心して過ごせる場所を作ること、心も身体も健康に育てていくことがお父さんと、お母さんの任務です」と答えると「ぎゅうして」と、とっても嬉しそうな顔をして抱き着いてきました。そのあとも、叱られたり、注意されると不安になるのか「お母さんぼくのこと好きじゃないの？」と言ったり、「お母さんのあれ、あれってなんだったこの前言ってたじゃん？」と、任務について確認しようとする言動もありました。Ｔ君は自分が大事な存在である、ということを確認したいのではないかと思いました。７月の授業参観日、教室には七夕の笹に願い事が書かれた短冊が飾ってありました。Ｔ君の短冊には「おかあさんとおとおさんといっしょに元気な家でくらしたいです」と書いてありました。嬉しいやら、切ないやら、複雑な心境になりました。真実告知をしていく中で、私たちと一緒に暮らせなくなるかもしれないとＴ君に感じさせてしまっていたのかもしれません。これからＴ君が成長するにつれ、もっといろいろな疑問や悩みがでてくると思います。まずはＴ君の話を真剣に聞こうとする姿勢を見せることが、これからもっと必要になってくるのだと思います。

子育てをする毎日は大変なこともありますが、Ｔ君がどんどん成長する姿をみながら一緒に喜んだり、悲しんだり、喧嘩をしたりする時間は私達夫婦にとって何物にもかえがたい時間となっています。何かあるとすぐ「ぎゅうをして」、寝る前にも「ぎゅうをして」と言ってきます。もうすぐ８歳ですが、まだまだ甘えたい年頃です。これからもＴ君がたくさん甘えられ、自分らしく、元気に楽しく過ごせるように、養育家庭としての任務を果たしていきたいと思います。

８「Ｏちゃんと里母さんとの強いつながりを感じた日」

発表者：里親（５０代女性）

家族構成：里親、実子２名

里親歴：１年

令和４年１月に養育家庭として登録をいたしました。今日は、私が里親をなぜやろうと思ったのかと、この夏、他の里親さんのお宅で過ごしているお子さんを、３日間レスパイトケアでお預かりしたときのお話をさせていただこうと思います。

まずは、里親になろうと思ったきっかけについてお話しいたします。

私は、５年ほど前から児童養護施設や里親家庭など、いわゆる社会的養護の経過を持つお子さんたちの退所後や里親家庭を巣立った後のサポートをしているＮＰＯで仕事をしております。

私が団体で出会うのは、高校生から３０歳ぐらいの人たちになります。高校３年生向けに自立のためのセミナーをやったり、居場所事業に関わったりしています。特に居場所に来る方たちは、「元気に暮らしている」というよりは、生活保護で暮らしていたり、精神疾患があったり等、どちらかというと生きづらさを抱えている方がすごく多いと感じています。元気で大学生になっていたり、働いていたりといった誰かに頼る必要がない人は、わざわざ居場所に来る必要はないため、相対的に生きづらさを抱えている人がすごく多いと感じるのかもしれません。

ＮＰＯの仕事をしながらも、もっと自分に何かできることはないだろうかとかと考えているうちに、「里親はどうだろうか？」と思うようになりました。

一方で、実子が高校生になり、あと少しで子育ては終わりという段階にあるなかで、小さいお子さんを　お預かりして、１８歳ぐらいになるまで、もう一回子育てをするというのはすごく大変だなとか、そんなに広くないマンションで住んでいますので、お預かりするお子さんのために専用の部屋を用意するのは難しいという思いもありました。里親をやるなら、実子が独立してから…など、決断できず、同じことをぐるぐる考えていた時期がしばらくありました。

そんな時に、里親をしている方のお話を聞く機会がありました。その方は小さいお子さんがいながらも里子ちゃんを預かっていました。短期の預かりがあったり、自分のお子さんよりも小さいお子さんを預かっていたりと、私からすると「大変そう」としか思えない状況なのに、とても楽しそうに見えました。その自然体な様子や、「今できることをやっ

ているだけです」とさらっとおっしゃるところがすごく印象的だったんですね。我が家の状況を踏まえ、できる範囲に限定したとしても、里親はできるのかもしれないと思うようになりました。

「今じゃない」と先送りしているうちに、介護か何かが始まったら、里親は絶対無理になることもあるでしょう。それなら、できるときにできる形でやってみようと思ったんです。その気持ちを家族に伝えたら、家族はわりとあっさり「いいよ」と言ってくれました。

研修を受けることを決めたころに、コロナが発生し、実子２人が家にいる時間が増えました。当時、実子は２人とも高校生で、同じ部屋で２段ベッドで寝ていたのですが、部屋を分けたいと言い出し、私が仕事用に使っていた部屋を明け渡すことになりました。その結果、里子ちゃんが来たらその子のために明け渡そうと思っていた部屋がなくなってしまいました。いまもその状態が続いています。

里親になるにあたり、どんなお子さんなら預かれるのかを児相の方とお話しした際も、夫と私の間で、実子が男の子だから、お年頃の女の子は難しいことと、部屋がないことを考えると、預かれるのは「小さい子」だねというところまでは、容易に一致しました。ただ、さらに突っ込んで、「小さい子」と言うけれど、「どれくらい小さい子なのか」という話になった時に、私と夫ではイメージが全然違っていて驚き、お互いの考えを話しすり合わせをしたこともありました。

また、里親に認定された後に、初めて受託のお話をいただいたときに、改めて家族と話したら、大学３年生になった長男が「じゃあ、俺、家を出ていくよ」と言ったんですね。誰かを受け入れるんだったら、部屋の都合上、自分が出ていくしかないと思っていたことがわかりました。それを聞き、長男が自分のタイミングで出て行くのではなく、私たちのタイミングで彼を追い出すことになることに違和感をもち、その受託はお断りしました。

里親に認定されたものの、受託がないまま時間は過ぎていますが、家族それぞれが漠然としたイメージでしかとらえていなかった「里親」が、共通の認識として、徐々に言語化されてきたように感じています。

ここからは、この夏３日間、３歳の男の子をお預かりした話をしたいと思います。Ｏちゃんと呼ばせていただきますね。Ｏちゃんは幼稚園の年少さんで、里親さんのところに来て数か月ぐらいとお聞きしています。お預かりすることが決まり、最初はわくわくしていたんですけれども、我が子が３歳だったころを思い出すうちに、３歳の子どもが全く知らない人の家に泊まりに行くのはかなりハードルが高いことを思い出しました。もしか

したら一晩泣き続けることもあるかもしれないと思い、泣いたら泣いたで、泣いている様子を隣で見守ればよい！それも想定内と思おうと腹を括った感じです。

Oちゃんがうちに来たとき、言葉は少なかったんですけれども、私がしゃべっていることはちゃんと理解していることがよくわかりました。徐々に慣れてくると、話しかけるとちゃんと返事をしてくれるのでとても楽しかったですね。とてもかわいいお子さんでした。

遊んでいるときに、Oちゃんが、わーと泣き出したことがありました。風船の空気入れで注射ごっこを始めたんですね。私の腕に注射しているときは、楽しく一緒に遊んでいたんですけど、だんだん顔に注射をしようとし始めたんで、これは危ないと思い、「顔は絶対駄目」と少しきつめの口調で止めました。そうしたら泣き出して、テーブルの下に入り込み、壁に向かって、しくしく泣き出しました。私が声かけても、Oちゃんは反応せず、「おばちゃん嫌い」とか、「いいかげんにしなさい」と私を叱ってみたりして・・・。これはしばらく様子を見るしかなさそうだと思っていたら、泣き声が気になった長男がやってきて、「どうしたの？」と声をかけてくれたんですね。そうしたら、気分が変わったみたいで、すぐに泣きやみ、また遊び始めました。

その様子を見ていて、実子が小さいときに泣きやまずに途方に暮れたときのことを思い出しました。泣き続けていたOちゃんは、私以外の誰かがちょっと声をかけたら泣き止み、遊びだしましたが、実子が泣き続けたときは「私以外の誰か」は不在でした。「私以外の誰か」がいないワンオペ育児の大変さをこんな形で改めて実感した瞬間でした。

もう一つ印象的だったことをお話しします。Oちゃんが里親さん（「ばばちゃん」と呼んでいました）がいつ迎えに来てくれるかを知りたくて、「ばばちゃんはいつ来る？ばばちゃんはいつ来る？」と、何度も聞いてきたんですね。どうやって説明したらわかってくれるか考え、カレンダーを使って説明することにしました。「今日はココ」と数字に丸をつけて、「１回寝て、２回寝て、お迎えはココ」と言って丸をつけてみました。そうしたら、Oちゃん「２個寝たらすぐ来る？」と聞いてきました。お迎えは夕方なので、「寝たらすぐ」ではありません。あわてて、「いやいや、ちがうちがう、夕方だよ」と言ったらきょとんとしています。そこで、「ご飯を２回食べて、おやつを食べたらね」と説明しました。これはちゃんと理解していましたね。

そして、最終日。里親さんが夕方お迎えに来たら、Oちゃんは、私なんかまったく相手にしてくれなかったです。帰り際に里親さんが「ほら、ありがとうは」「バイバイしなさい」とかとおっしゃるんですけれども、ぷいっと横を向いたままでした。マンションの自

転車乗り場まで一緒に行ったんですけども、手もつないでくれないし、バイバイもしてくれませんでした。うちにいたときは、私を頼るしかなかったから頑張っていたんでしょう。でも、ばばちゃんが来れば、ばばちゃんのほうが大事。もう絶対的にばばちゃんなんですね。本当に里親さんのお迎えを心待ちにしていたんだなと感じました。

里親さんのところに来てまだ数か月とお聞きしましたが、短期間で里母さんとの関係がしっかりと出来上がっていることを感じました。

我が家は現在、長期でお子さんを受け入れることは難しいのですが、それでもできることはありますし、この先、実子が家を出ていったら別の形でできることがきっとあるのだと思います。無理せず、その時にできる形で、お子さんを受け入れていけばよいと思っています。多くの方が思う里親は、「小さいお子さんを受け入れ、大きくなるまでじっくり関わる」という形かもしれませんが、私のイメージは、お子さんが我が家で羽を休め、力を蓄えたら巣立っていく感じ。我が家を通り過ぎていく…そんな形でたくさんのお子さんと関われるといいなあと思っているところです。

９「この世に生まれて良かったと感じてもらうために」

発表者：ファミリーホーム里親（５０代男性）
家族構成：里親（夫・妻）、実子（高１女子）、里親父母（夫の両親）、委託児童５人（高２女子・中２男子、小３男子・小２男子・小１女子）、成人した里子
里親歴：１０年

社会的養護のもとで暮らす子どもについて、お話をさせていただきます。

まず、里親になろうとしたきっかけをお話します。

結婚して数年が経っても、なかなか子どもが授からず、もし子どもが授からなければ里親も良いかなと漠然とありました。というのも、私は５人兄弟の長男で、親の兄弟も８人と常に大家族で育ち、子どもがいない生活はイメージにありませんでした。また、私の知り合いに里親をされている方がいて、子どもがのびのびと、本当の親子のように自然体で育っていることを知り、気取らずに社会貢献されている姿に感動し、いずれ里親をやってみたいと思うようになりました。

平成23年、東日本大震災があり、「津波で両親を亡くして、孤児となった子ども」がたくさんいるというニュースを、たまたまテレビで見かけ、「私たちに何かできることはないだろうか」と妻と考えるようになり、児童相談所の門を叩くことになりました。

里親になるためには、さまざまな研修を受ける必要があります。ある児童養護施設に２日間、研修に行った時のお話をさせていただきます。

施設では、まず大きな部屋に案内されて、そこには、たくさんの子どもがいました。私と妻が部屋の真ん中に座ると、幼い子どもが近寄ってきて膝に乗ったり、背中に乗ったり、人懐っこいのに驚きました。また、対照的に部屋の片隅で膝を抱えた子が、遠目にこちらを見ていて、何かをアピールしている様にも見えました。

施設研修で、３才になる女の子Mちゃんの担当になりました。付きっきりでお世話をさせていただきましたが、何でも自分でできる賢い子でした。手を繋ぐと、私の手をしっかり握り放そうとしないのが印象的でした。

２日目、施設に行った時、Mちゃんが私のことを「お父さん」と呼ぶので、「おじさんは、Mちゃんのお父さんじゃないんだよ！」と言いましたが、また「お父さん！」と言い続けます。私たちが帰るまで、お父さんと呼んでいました。

その晩、Mちゃんのことを考え、なんで初めて会った人を「お父さん」って呼ぶのかなと、頭の隅から離れませんでした。勝手な解釈ですが、３才ながらに「いつか、お父さん

やお母さんが自分を迎えに来てくれて、家族で暮らすのを夢見て、私のことをお父さんと呼んだんだ！」と思ってしまいました。駄々をこねたり、ぐずったりしてもおかしくない３才児です。Mちゃんの健気な姿から、幼いながらにも気を張って生きている様にも見え、穏やかな家庭的な生活の場が必要だと感じました。

平成25年に里親認定を受けた、その年の暮れ、Ｙちゃんという中１の女の子を一時保護で預かってほしいと児童相談所より話がありました。里親になる時、事前のアンケートに希望の年齢と性別を書く欄があり、妻は３才くらいの女の子と書きました。私たちが思う里子のイメージは、小さい子どもと思っていたので…急に中学生と聞くと、多感な年齢で口も聞いてくれなかったらどうしようかとか、あるいは何でも口答えする子だったらと、良いイメージがわきませんでした。でも、「相手の中学生だって、どこの誰かも知らない家に行くことは、我々より遥かに不安だと思うよ。できてもできなくても、親代わりとして、受け止める努力をしよう」と引き受けることにしました。

会ってみると、小柄で目のくりっとした子鹿のような子でした。目を合わせず、指先が震えています。知らない大人に会うことが、不安だったと思います。うなずくばかりでしたが、妻が「うちに５才の娘がいるんだけど、大丈夫？」と聞くと、うつむきながら「私、子ども大好きです」と答えてくれました。その後、うちで預かることになりました。

初めて我が家に来た時、泣いてばかりいて、本当にこの先大丈夫だろうかと不安になりましたが、娘がＹちゃんに近寄っていき、彼女の笑顔が見えた時とても和んだのを覚えています。

Ｙちゃんは中１で保護されました。のち、自分が生まれて間もなく乳児院に預けられたことを知り、実親の存在があることもわかりました。精神的につらかったことと思います。

当初入る高校がないと先生に言われていましたが、なんとか高校には入り、簿記やパソコンを覚えたり、少しずつ自信が持てるようになりました。

高校を卒業して、同じ系列の「保育専門学校」にも入ることができました。今、幼稚園教諭を経て、近くの保育園に再就職して社会人としてがんばっています。今では、うちの長女としての存在であり、「お嫁に行くまでここに居たら」と私が勝手に言っています。

Ｊちゃん姉弟の母親はシングルマザーで、一生懸命生活と子育てをしていましたが、病気になり事情があって姉弟で社会的養護となりました。当時、小学２年生だった彼女が育ったのは、私の住んでいる同じ町内で、たまたま町内に里親をしているお宅（つまり私の家）があり、本人も今通っている学校を変えたくないとの希望で、異例なケースだと思い

ますが、児童相談所の配慮で特別に我が家に来ました。同級生やその親御さんは、小学２年生で来たＪちゃんとは、保育園からの知り合いです。その子が、知らない家に姉弟で引き取られ、今、大変苦労をしているという噂がたちました。その後、Ｊちゃんが６年生の時の謝恩会の中で、子どもが親に感謝の手紙を読むという催しがありました。周りの方も、里親と里子の関係は知ってはいますが、どんなことを言うのだろうと思ったと思います。その手紙を少し読ませていただきます。

「お母さん・お父さんへ

お母さんたちに出会って、３年たって今年で４年目になります。来たばかりの時は、友達にこの状況をどう説明しようかと不安がたくさんあったけど、今はもう、そんな事聞かれない程、時間がたちました。「本当の親」ではないと意識すると、やっぱり言えなくて、ためこんだ時期もありました。それでも、毎日、昔からの友達に会えること、普通の生活ができるのは、お母さん、お父さんが、私と弟を引き取ってくれたお陰だと思っています。この家に来て、この家族に出会って、不満に思うこともありました。だけど、少し時間が経つと「この家に来てよかった」「この家族に出会えてよかった」と思う時があり、幸せを感じることもありました。実の親子ではないのに、普通の親子として接してくれたり、私の将来について、しっかり考えてくれたりしてくれることに、とても感謝しています。私は、素直になれない事があるから、大変だと思う。自分でも「なんで言えなかったんだろう」と思ったことも沢山あった。こんな私でも受け入れてくれる、お母さん、お父さん心から尊敬しています。そして、今まで本当にありがとう。これからもよろしくお願いします。」Ｊより、とありました。

会場内にいた人を巻き込んで、お互い大泣きをしてしまったそうですが、その席で、初めて実母の親しいママ友さんから妻が声を掛けられたそうです。「今までわからなかったけど、Ｊちゃんが大変お世話になってありがとうございました。里親とか知らないから、どうしてＪちゃんがいるのかわからなかったけど、さっきの手紙を聞いて安心しました」と言ってくれたそうです。すこしホッとしました。

帰ってから、Ｊちゃんが、「友達のお母さんからよく言われるんだけど、「大変だけど頑張ってね！」とか「つらくない？」と声を掛けられるんだよね。なんでそんな風に言われるのかなー？　別に苦労もしてないし、つらくもないよ」と不思議がっていましたが、本人が、そう思えているのなら里親として、とても安心しました。

里親10年と言っても、同じ子は１人もいないので１年目と同じです。なので、１から始

まった感じです。以前は、子どものしつけは親の責任のようなことだと思っていましたので、ありがとうや挨拶ができない子は、親の躾がなってないと思っていました。でも、そこには自分のプライドを子どもに押し付けていたことに気が付きまして、プライドを捨てて、なるようになるくらいで良いのかなと妻と話をしています。

数年前、東京都知事から、里親として感謝状を頂く式典があり、参加させていただきました。私の両隣は、１人はダウン症の子を預かっている里親さん、もう１人は車椅子を横に倒し鼻にチューブを通された重度障害の子を預かっている里親さんでした。２組の里親さんはニコニコされ、「私、おむつ交換が苦じゃないんです」とおっしゃって、その席に自分たちがいるのが恥ずかしくなりました。こういうことは、あまり知られていないと思いますので、そういう方々がいて、陰でこの社会を支えているんだと思いました。

最後に、日本も里親委託率が先進国で１番低い国を脱却して、2024年度までに３才未満の子の75％以上を、児童養護施設から里親家庭に転換する目標を掲げています。ただ、里親には当然ながら責任が伴います。里親になっても、養育の難しさや相性から辞めていく方もいます。今後、里親への支援する体制を整えなければ里親委託率は上がらないと思います。

虐待を受けた子どもが保護されたと聞けば、誰もが「良かった！」と思いますが、保護された子どもは、その後、長い支援が始まります。自尊心を持ち、自己肯定感を持ちながら１人の社会人になるまでの支援をしなければなりません。

子どもは親を選べませんが、この世に生まれて良かった、と感じさせることはできます。自己実現ができる人生を送れるようにしたいと思います。

今年10月、葛飾区児童相談所が開設されました。「葛飾の子どもは葛飾で守る」と葛飾区児相の心意気を感じ、是非里親仲間を増やしていただきたいと思います。葛飾区児相の取り組みは、毎月里親同士の集いの場、サロンを開催して、里親ならではの悩み事や交流も行われ、フォスタリング機関も充実し、安心して里親ができる体制になっています。

是非、一緒に里親活動（サトカツ）しませんか！

お付き合いいただきありがとうございました。

１０「乳児院から我が家へ
２歳の子が色んな気持ちを乗り越えて」

発表者：里親（５０代女性）

家族構成：里親、委託児童（（当時）３歳女の子）

里親歴：５年

今、３歳５か月の女の子の里親をさせていただいています。私と夫は会社員で、子供は保育園に通っています。子供はうちに来る前は乳児院で暮らしていて、２歳半の頃から一緒に暮らすようになりました。来てすぐの頃はとても緊張していましたが、今は公園で初対面の年上の子たちにも自分から近づいて積極的に遊んだりしています。正式に委託が始まったのは２０２３年の１月で、まだ１年も経っていない新米の里親です。

里親登録の動機ですが、実子がいなくて、夫と二人で暮らしていましたが、子育てをしてみたいという気持ちはありました。里親のことをテレビで知って、いつかやってみたいと思うようになりました。何年か経ってから夫に相談して、まずは児童相談所で話を聞くところから始めました。

私たちは、できれば一人の子供と長く暮らしたいという気持ちだったので、初めは養子縁組里親に登録しました。その後、養育家庭で長期間一人の子供を育てている方は沢山いらっしゃることを知り登録２年後の２０２２年２月更新のタイミングで養子縁組里親から養育家庭へ切り替えました。

交流から委託開始までの流れは、２０２２年の７月に子供を紹介いただいて、８月の下旬から交流を開始しました。初めは週に１回、土日に夫婦そろって乳児院で交流し、そのうち私が平日に休みを取って交流する日もありました。子供と私たちの三人だけで過ごす時間を少しずつ長くしたり、食事やお風呂とか昼寝など、やることを増やしていくという流れだったのですが、うまくいかなくて、落ち込みながら帰っていました。でも、子供は本当にかわいくて、いつもうれしい気持ちと落ち込む気持ちの両方でした。

私たちはお風呂もろくに入れられず、子供が「お風呂入らない」と言って、リュックを背負って胸のとめ具を閉めて洋服を脱がせられないようにしているのを見ていると、困るんですけどかわいいなと思いながら見ていました。

１１月から子供が家に来て、最初は日帰り、１１月の下旬には２泊３日の外泊に進みました。この自宅での交流が思ったよりうまく進み、１２月の初めには長期外泊を始めて、

１月の中旬に正式な委託が決まったという流れで交流はトータルで約５か月間でした。

交流中、私と夫は下の名前でアッコちゃんとヒデ君と呼んでもらうことにしました。

初めの頃は、子供は私たちと目を合わせてくれなくて、下を向いたり背中を向けたりして、着替えも嫌がって泣いていたので、私たちが来るのは嫌なのかなと思ってしまうこともありました。

そんな中、たまたま私が一人で交流に行くと、子供が「ヒデ君は？」って聞いてくれました。名前を呼んでくれたのも初めてだったのですけど、いない、どうしてって思ってくれたことがうれしくて、子供の中で私たちの存在が少しずつ大きくなって、来るのを待っていてくれていると感じることができました。

その日から子供は私たちのほうを見て笑ったり話しかけたりしてくれるようになって、後になって思ったのですが、緊張していたのは子供だけじゃなくて私たちも緊張して、早く仲よくなりたいと焦ってしまって、緊張が子供に伝わってしまっていたのかなと思いました。交流の進み方は人それぞれだと思いますが、焦らないで子供のペースで進めるという気持ちを改めて思い出した出来事でした。

１１月の初めに委託開始に向けた具体的なスケジュールが決まり、仕事と保育園の具体的な調整を始めました。上司もチームメンバーも本当に温かく応援してくれ周りの方の協力があったおかげで、私は長期外泊中は仕事を忘れて子供との時間に集中することができたなと思っています。１２月に長期外泊が始まりましたが、子供はとても緊張していて、言葉も出なくなって、どもるようになってしまいました。でも私たちが気にすると子供にも伝わってしまうと思ったので、とにかく笑って、はしゃいで過ごしていました。子供は歌うときは声が出たので、サンタクロースの歌を何度も一緒に歌っていました。

子供はとても心細かったと思いますが、私がキッチンやトイレに行くときもついてきたり、何かさみしそうな顔をして抱き着いてきたりしたので、なるべくそばにいるようにしていました。夫が長期外泊中は毎週金曜日に休暇を取ってくれていたので、その日は夫と子供が二人で過ごす時間を取るようにしていました。

お風呂のときは私が服を脱ぐと、「怖い」と言ったので、バスタオルを巻いて入ったり、私が入っているところを外から見てもらったりして、慣れてもらいました。

毎日公園に行ってスキンシップも取りながら遊んで、少しずつ声が出るようになってきましたが、１２月中旬くらいになると、今度は大泣きをして、物を投げたり、わざとご飯をこぼしたり、感情を表に出すようになりました。毎日の夜泣きも始まり、夜中に「もう

嫌だ」と言って起き上がって泣き出して、部屋の隅に行って、両手をグーにして力を入れて、顔を真っ赤にして「ねんねしない」とか「だっこしない」、「キティちゃん怖い」、「もう嫌だ」と言って泣いていました。「嫌だね」とか「怖かったね」と声をかけたり、少し離れたり、あと、だっこして落ち着くときもありますが、すごく嫌がって私をたたいたり、唾を吐いたりした時とかは１回座らせて、少し離れてからまた話しかけたりしていました。最後はだっこして、少しお話しして、「寝る？」と聞くと「寝る」と言うので、手をつないで寝ていました。

子供は２歳だけど、記憶と意思が結構しっかりしていて、言葉にはしませんでしたが、乳児院に帰りたいと強く思っていて、連日の夜泣きにつながっていたと思います。子供は施設にいるときは本当に楽しそうで、大好きな先生と仲よしの友達と幸せに暮らしているんだなと私も感じていました。よく考えたら、いきなり別のところで暮らすなんて嫌だなと私自身も思ったので、子供の気持ちは受け止めながら、少しでも不安が減るといいなと思って過ごしていました。夜泣きは１月半ばの保育園に通い出した頃から少しずつ減っていった気がします。春くらいに久しぶりの夜泣きがあって、どうしたのかと思っていたら、子供が乳児院の大好きな先生のお名前を叫んで「帰りたい」と言っていました。どきっとはしましたが、初めて気持ちを言葉にできたなと思い、子供に「さみしかったね。今度会いに行こうね」と話しました。

乳児院に行ったら、もうおうちに帰らないと言うかもしれないなとは思いましたが、子供の気持ちを抑えるのもどうかと思ったので、里親支援専門相談員の方に相談して、遊びに行ってきました。その日、帰るときは子供、やっぱり泣いてしまったんですけど、その先生に泣きながら「一緒に帰ろう」と言っていて、「あ、うちに帰ることは受け入れてくれているんだな」と思って、うれしかったです。

子供が会いたいと思うならこれからも会えるよ、忘れなくてもいいよというのを伝えて、安心して過ごしてくれたらいいなと思っています。

もう一つ印象的だったことで、私たちの呼び方をどうするか子供に聞いたときの話をします。

子供には産みの親御さんもいらっしゃいますし、これまでの呼び方でいいと思っていましたが、いろんな方のご意見も聞いて、保育園等でなじみやすい呼び方ということでパパとママと呼んでもらおうかという話になって、正式に委託が決まった後に子供に聞いてみることにしました。その日はケーキを買ってきて、「お話ししたら食べようね」と伝えて

から話を始めました。「これからも三人で暮らすことになったよ」と伝えて、「私たちはお父さんとお母さんになりたいと思っているんだけど」と話したくらいで「嫌だ」と言われてしまいました。「ええ」と思って、もう一回話をしてみたんですけど、やっぱり嫌だと言うので、「分かりました。じゃあ、これから一緒に暮らして、もしお父さんとお母さんって思えるようになったら、そのときはパパ、ママと呼んでね」と話をすると、今度は嫌だとは言わず、うんとも言わず、「おやつ」と言いました。それがこの子の今の気持ちなんだなというのが十分分かったし、私たちの気持ちも伝えたので、もうおやつを食べることにしました。子供には、「ヒデ君とアッコちゃんは〇〇ちゃんのこと大好きということは覚えていてね」と話すと、そこははっきりと「うん」と言ってくれました。

小さくても、ちゃんと伝わるし、子供の気持ちも伝わってきて、もちろん全部理解して気持ちをきちんと言葉にするというのはできないと思いますが、まだ小さいから分からないと決めつけないでゆっくり話したり気持ちを聞いたりしていきたいなと思いました。

私は、仕事復帰のために保育園を検討しているときは、委託開始してもすぐに仕事復帰しないで子供との時間をもっと作ったほうがいいのかなとか、迷ったりもしたんですけど、先輩の里親に「うちの子の場合は、保育園は乳児院と生活リズムが似ていて、過ごしやすかったみたいだし、あと、預けることのメリットもいろいろあるよ」と教わり、選択肢がいろいろある中で、うちの子にとって、私たちにとってどれがいいかなと考えて決めることができたと思います。

最後になりますが、子供がうちで暮らすようになって１０か月ちょっと経ちましたが、子供はおしゃべりが上手になってきて、今日保育園であったこととか、あと何か自分の意見とかをたまに文章で伝えるようになってきて、とても楽しく過ごしています。いたずら好きで発想も豊かで、本当にかわいくて面白くて、私たちも幸せな気持ちで過ごしてます。

振り返ってみると、私たちは子供の気持ちを聞くことと、自分たちの気持ちを伝えるということを地道に続けてきたのかなと思います。その中で子供自身が経験して、成長して、いろんな気持ちを乗り越えて頑張ってくれたと思います。

うちはまだ真実告知も部分的にしかできていません。子供はこれから成長していく中で悩みとか複雑な気持ち、いろいろ出てくると思いますが、誰かに打ち明けたり頼ったりすることもできるようになってくれるといいなと思っています。私たち自身も子供とそういう関係になっていけたらというふうに思っています。

１１「里子との日々の暮らしの中で」

発表者：実子（２０代女性）

家族構成：里親、実子（自立・発表者）、委託児童（複数名）

私の家族は、父、母、四人姉妹の六人家族です。私は３番目になります。結婚を機に幼稚園を退職して、現在、１歳の娘の育児に奮闘しながら、実家のファミリーホームで働いています。今、実家では五人の子が委託されています。

今日は、里子と一緒に生活していたときのエピソードや、現在職員としてファミリーホームで働いているときのエピソードを通して、感じたこと、思ったことをお話ししていきたいと思います。

最初の子が委託されたとき、私は小学４年生でした。里親を始めるときに、母から「里親を始めようと思うんだけど、どうかな」と話があったことを覚えています。私は、どんな子が来るのかな。早く会いたいなと、不安な気持ちはありませんでした。

初めて委託された子は２歳の男の子でした。初めて会った日のことは覚えていませんが、たくさん話しかけて、距離を縮めていったことを覚えています。

特に違和感なく、新しく弟ができたという感覚で、その子がかわいくて仕方がなかったです。委託期間は数年と決まっていたので、委託が終わってしまうことを考えると涙が出てしまうほどでした。その子と遊ぶことも楽しみの一つでした。

その後、その子がかわいい弟であることは変わることはなかったですが、月日は流れ、それと同時に私は母と二人で洋服を見に行ったり、買物に行きたいなと思う気持ちも出てきました。もともと四人姉妹で、ただでさえ母と二人で過ごす時間はなかなかないので、その中で小さい子がいるとならなおさら難しいことです。どこに買物に行くにも家族でぞろぞろと出かけて、その時間が嫌なわけではありませんでしたが、母を独り占めしたい気持ちがあったのだと思います。そんな思いを口にする前に、私の中でそれはできないことと思っていました。

少し反抗期が始まっていた中でのその気持ちだったので、素直に言えない私もいたのだと思います。そしてきっと、そのとき、それを母に伝えていたら、母もその時間をしっかりつくってくれていたことと思います。

中学生になると、委託される人数が二人、三人と増えていきました。私は、学校と部活で毎日が忙しくなり、小学生の頃より、里子たちと関わる時間が減っていきました。それでも、変わらず里子たちが兄弟のようにかわいくて一緒に遊ぶ時間が好きでした。

中学生ということもあり、家族で出かけたときに周りの目が気になるようになりました。ぞろぞろと普通の家庭の人数以上の人数で歩いていると、通りすがりに「何の集まりなんだろう」と聞こえたことがあり、ただの疑問から出た言葉と分かっていながらも、やっぱり周りから見ると何と思われるのかと思うと、外で家族といるときに友達に会いたくないなと思うようになりました。また、学校の授業参観に里子を連れてくるのか、気になったことを覚えています。友達に里親をやっていることを何て説明したら伝わるのか、どこまで話をしていいのかも分からなかったのだと思います。

そんな思春期を過ごしながら、それでもいつも里子のことがかわいくて仕方がありませんでした。でも、それは私と年が離れた、まだ幼い子たちだったからそんなふうに思えたのだと思います。

一時保護委託で年の近い子が委託されたときに、鋭い視線や、ピリッとした空気感があったことをすごく覚えています。もし、年上の子が委託されていたら、思春期に年の近い子が委託されていたら、どんなふうに関わっていいか分からず、悩みがあったと思います。また、私が将来の夢を考えたときに、子供と関わる仕事をしたいと思ったのは、里子たちと過ごしてきたあの日々が大きかったと思います。

幼稚園に就職をすると、仕事が充実して、やりがいを感じながらも里子と遊んだり、関わる時間が減り、里子の学校行事に参加できないことが増えました。学校行事は、里子の成長を感じる瞬間がたくさんあるのに、それに参観できないことがその当時は悲しかったです。

その後、私の結婚、妊娠と祖母の介護が始まったことをきっかけに、実家で母の手伝いをすることを決めて、現在に至ります。

現在のファミリーホームの職員としての毎日は、独身時代に私が実家に住んでいたときと同じように毎日里子たちに会えて、母の手伝いをしながら、里子たちの学校行事を見に行けることがうれしいです。何げない毎日の会話が里子たち一人一人とのコミュニケーションにつながっていると感じます。また、それが何か学校の出来事で困ったときや悩んだときに、私に話をしてくれることが里子たちの中で選択肢の一つになってくれていたらうれしいなと思っています。そして、「この子がこんなことを言っていたんだけれど、何だろう」「最近こんな様子なんだけど」など、母と話をすると、その子一人一人にどんな声かけや関わり方がいいのか、その子の課題が見えてくる気がします。

夏休みなどの長期休みには、里子たちとやりたいことを相談して、リストアップをして

います。お家縁日やプラバン、クレープ作りや花火にプールなど、たくさんのことが出てきます。小さい子が楽しむような内容でも、中学生のお姉さんたちもその日を楽しみにしてくれて、反抗期を迎えていながらも、楽しんでくれる姿は本当にかわいいものです。また、お家縁日を家族でやったときには、参加しないかなと思っていた高校生の男の子が出店側を率先して手伝ってくれて、思いがけないところで成長を感じることができてうれしかったです。

また、現在、里子の末っ子のＲちゃんは、私が第二の母のような関係性で、幼稚園の親子競技や小学校の参観日などに私を指名してくれて本当に娘のような存在です。そして、今、私の娘が実際に生まれたことにより、末っ子だったＲちゃんは、今自分よりも小さい子に我慢をすることの勉強中で、１歳児相手にかわいいけんかをしています。また、娘にとってもすごくよい刺激となっています。

また、学校の代休など、里子一人だけお休みの日は、その子の見たい映画ややりたいことなどを優先して、お楽しみの日となるようにと思っています。ふだん、それぞれ我慢してくれていることや譲ってくれていることはよく分かっていますし、集団生活でどうしても必要なことですが、できるときは一人のそういう日をつくってあげたいと思っています。

実家で働き始めて２年目になりますが、里子に何かトラブルがあると、叱る役は母で気がついたらフォローに回っている私がいて、何となく私がいいとこ取りしている気がしてしまうこともありますが、私は私で役割があると思っています。

現在、実家に委託されている子は大きくなり、落ち着きも出てきました。五、六年ほど前は、手のかかる子が多く、その当時は私も幼稚園の先生をしていて忙しく、母のサポートに回れるほど、自分にも余裕がありませんでした。今、その当時の話を母から聞くと、もっと母のサポートができていたらなと思うことがたくさんあります。また、それと同時に生活面で手のかからなくなってきた今、次は進路や自立に向けて一人一人にあった幸せな道を一緒に見つけて考えていくところに来ているのかなと思います。

最後にはなりますが、これまで里子たちと過ごしてきた日々は私にとってかけがえのない時間と経験になっています。また、ここのファミリーホームで過ごした時間が里子たちの人生の土台となって、自立してからも安定した幸せな日々を過ごしてほしいと願っています。そのために今、何げない一日を大切に過ごしていきたいです。また、里親のことも、もっともっとたくさんの人に知ってもらいたいなと思います。

１２「我が家のちび姫～もう一度子育て、自分育て」

発表者：里親（５０代女性）

家族構成：里親、委託児童（（当時）６歳女の子Ｐちゃん）、実子２名

里親歴：７年

「我が家に生後５か月の赤ちゃんが来るかもしれないよ」そんな話しを夫から聞いたのが、次女が高校受験を迎える春でした。

その頃、私は世の中の虐待のニュースを聞く度辛く、また娘たちに命の大切さを伝えて育ててきたけれど果たしてこの子達は自分自身を大切にし、女性として命を生み出す性をきちんと理解しているのだろうか、そんなことを考える日々が続きました。そして、生まれて来た命を助けてあげることは出来ないのか思う気持ちは続きました。

そんな毎日を過ごし、探して見つけたのが里親でした。

子育ての終盤をあと数年で迎えようとしているとき、色々な気持ちが揺るぎました。夫は「今更、そんな大変な事をするなんて」、長女は「妹居るのに赤ちゃんなんていらないよ」、次女は「知らない子が家に来るの嫌だな」と言うかもしれないと考え、家族に伝えることが出来ずにいた毎日。唯一、私の父は賛成してくれるんじゃないかと、私の中でいろんな気持ちが沸いては消えて行きました。

そんなあるとき、生まれた赤ちゃんを畑に置き去りにしたニュースを知り、「そんな事するなら、家の前に置いてくれたら良いのにね」と口に出したとき、夫も娘達も「本当にそうだと思う。家の前に置いてくれたら皆で助けられるのにね」と言ってくれました。

これは、もしかして一家で賛成してくれるのではないかと思い、里親になりたい気持ちを伝えました。

夫も長女も「赤ちゃん来てくれたら良いね」、次女は「ずっとお姉ちゃんになりたかったんだ。赤ちゃんのお姉ちゃんになりたい」と大喜び。私の父は「すごいことだね」と一家で里親に向けて動き出した瞬間でした。

そこからは、時間がもったいないと、夫とすぐに児童相談所に通い、手続きを進めて行きました。我が家は小さな赤ちゃんからの受け入れを希望し、乳幼児の研修も受けました。

研修実習を終えた２ヵ月後、次女の高校受験の終わりを迎える春に縁あって生後５ヵ月のＰちゃんの受託のお話がありました。

初めて写真で見たＰちゃんはお雛様の前で赤いワンピースを着て、やっとお座りが出来たのが嬉しいのか、満面の笑顔、ぽちゃぽちゃしていてまん丸の可愛い女の子でした。

私たち一家は、すぐに会いに行きたいことを伝え、一家で初めてＰちゃんに会いに乳児院に行きました。

皆、わくわくで、特に次女が満面の笑顔。待っている時間もわくわく。そして抱っこされた小さな小さな可愛い赤ちゃんが、緊張したお顔で私たちの所に来ました。抱っこするとあまりにも小さくて、懐かしいやら、可愛いやら、久しぶりの赤ちゃんの温もりに緊張するやらでした。

大喜びの私達とは反対に、Ｐちゃんは緊張して顔がこわばり、私達を見て大泣き。帰りには、Ｐちゃんを迎える事を踏まえ真剣に家族会議をしました。

時間が許す限り面会に行き、春の穏やかな日差しが降り注ぐ日、近くの公園に娘達が抱っこしてお散歩に行きました。

嬉しくて仕方ない次女に抱っこされて緊張したＰちゃんと３人で初めて写真を撮りました。年の離れた３姉妹の初写真です。その写真は、ずっと私の宝物で部屋に飾っています。

面会を重ね、４月には我が家にお泊まり。我が家に響く泣き声は今までとは全く違う世界を見せてくれました。

ミルクを作り、離乳食を食べさせ、オムツを替える。十数年ぶりの感覚に、時間が戻る錯覚さえ感じました。

夜寝るときも、夫と私の間で川の字になって寝る。何もかも懐かしく、新鮮で、嬉しくて、可愛くて仕方ありませんでした。

ゴールデンウィークの頃に長期外泊になり、６月に正式の委託となりました。

そこからは天国と地獄でした。忘れていた赤ちゃんの子育て。環境が変わったこともあり、不安からいつも私達を求めて泣く。小さな赤ちゃんでも７キロ近くあると徐々に重みがかかり、腕が筋肉痛になるほどでした。

夫が大半の育児をかって出てくれましたが、それでも仕事と育児に追われる毎日。そして必ず明け方４時頃、夜泣きで起こされ、ミルクを作り、あやして飲ませる夫の背中を見ていました。小さな赤ちゃんの頃はパパっ子で、ハイハイをしていつも夫を追いかけていました。

私達も環境の変化、体力的にも疲労が募り、一時期「もう無理かな」と何度も夫婦で話し合ったこともありました。だけど笑って私達を求める姿を見ていると、Ｐちゃんのパパ、ママは私達しか居ないと、夫婦で再確認しました。

そんな想いと裏腹に成長するＰちゃん。初めて立っちした日。初めてパパ、ママと言ってくれた日。よちよち歩きを始めてちっちゃな手を繋いで歩いた日。初めて家族旅行に行き、帰りの日高熱を出し慌てふためいて家に帰った日。

１５年ぶりの育児が楽しく、また自分と向き合う大切な時間になりました。

それは年齢です。娘達を育てていた頃は、２０代後半から３０代前半。受託当時はアラフィフです。

成長することは嬉しいことですが、活発な子のため走って追いかけるのが年々大変です。ある意味では健康管理のため、良い運動になっています。

この子との時間を大切にと思うのであれば、健康管理にも目を向けるようになりました。この年になって、改めて自分を大切にしようと思っています。

今は6歳になり、来年は小学生です。一つ一つできることが増えて、最近では「ママ大好き」と絵を描いてプレゼントしてくれます。保育園や家で家族５人の絵を描いて「コレ飾って」と額に入れて壁に飾り、インテリアになっています。絵の中に「大好き」と書いてくれるので、家の中に「大好き」があふれています。

ふとしたときに、赤ちゃんの頃の写真を見て、Ｐちゃんは「お猿の時にママに会いたかった」、「ママから生まれたかった」とぼそっと言いました。生まれたてのＰちゃんの写真を見て次女が「ちっちゃなお猿さんみたいで可愛いね」、「生まれたときはみんなお猿さんみたいなんだよ」と話していました。

Ｐちゃんには長い時間をかけて分かる言葉で真実告知をしています。
酷かと思われるかもしれませんが、生い立ちを知ることは「子供の権利条約」というものに定められています。

私達も抵抗はありました。研修などで学んだ様に、今私達にＰちゃんを託し育てている地域、児童相談所の方々たくさんの人が関わっていること、大きくなったときに一人で抱え込まないようにたくさんの力を借りて大きくなっている事を分かってもらえるように生い立ちを話しています。そのため胸を締め付けられるような事を家族に話します。

実際、今日もここに来るときに「Ｐちゃんの名前は誰が付けてくれたの？」と言い、児童相談所の方の名前を言い「〇〇さんが付けてくれたの？」と言いました。「Ｐちゃんの名前は、産んでくれたお母さんが付けてくれたんだよ」と言うと、抱きつき「ママに名前を付けてほしかった」と言いました。

私達以上に、小さな頭で色々なことを思い、抑えきれない気持ちを伝えてくれることを

受け止めて行かなければならないと思っています。
だから、どんなことにも動じない肝っ玉母さんになりたいと思います。

先日、保育園の運動会があり、満面の笑顔でいるＰちゃんを見て、私達家族を中心に地域の人や保育園の先生、児童相談所の担当の方々、娘達とママ友、皆に支えられてここまで大きくなったんだなと改めて思いました。

７キロに満たなかった赤ちゃんが、今は１８キロの女の子に成長しました。１０キロ以上の重さは、私達が育ててきた軌跡だと思います。

これからも皆に見守られ、育ち、私達家族も共に成長していきたいと思います。

皆様の中に、少しでも里親に関心を持たれる方がいらしたら、家庭の温もりを子供達に与えていただきたいと思います。

１３「広がれ！養育家庭！（我が家の場合）」

発表者：里父・里母（５０代男性・４０代女性）

家族構成：里親、委託児童（（当時）３歳の男の子）

里親歴：１年

【里父】

私たちは結婚して２０年くらいたっています。私どもと高校３年生の実子の娘と３歳２か月の男の子の里子が今います。あと、猫２匹とインコが１羽います。

共働きで妻は訪問介護事業所を経営、私は営業職の会社員です。ちょうど里子ちゃんが来たときは、コロナがあったので、ほぼ在宅になっていました。呼び名は、オカサオトサというふうに呼んでもらっています。

実子の娘は、呼び名は、モッサと呼んでいます。

新しく家族になった里子ちゃんは、今回の呼び名は、仮でデンデンとさせてもらいます。理由は、保育園での彼のマークが、かたつむりだからです。

最初に里親を始めると言い出したのは、オカサのほうです。そこに至った経緯をオカサのほうから話してもらっていいですか。

【里母】

里親を始めたいと最初に言い出したのは、私です。

もう一人子供が欲しかったのですが、恵まれなかったので、３５歳を過ぎてからは里親になりたいと思い始めましたが、当時は共働きではないことが強く推奨されていたので諦めました。

再び思い出したのは、娘が中３の受験期でした。教育の前に福祉が足りていない子供たちのドキュメントを見て、乳児院や児童養護施設にいるお子さん方とこの高校のお子さん方はイコールではないですが、課題のベースは同じだろうと思いました。

娘の高校進学が決まってから、オトサに里親の話をして、二人で児童相談所を訪問しました。

【里父】

まずは、話を聞いてみようという感じで児童相談所へ行きました。先ほど制度の話もありましたが、里親制度についてや養育家庭、あと養子縁組の違い等も全く分からず、説明してもらいました。

その場で登録しますというふうに意思表示をしましたが、一旦、冷静になって、持ち帰

って考えてくださいと言われました。

【里母】

それでは、里親になりたいという意思表明をしてから、実際にデンデンが我が家へ受託になるまでの２年間の私たちのお話をいたします。

私たちのケースはあくまで一例です。

登録前の研修や登録後のスキルアップ研修を終えて数か月たった頃に、児相の担当さんからお電話で「生まれてすぐに乳児院に入り、もうすぐ２歳になる男の子が恐らく成人するまでの長期委託になるケースです。どうですか」と声をかけていただきました。

オトサに話して、すぐにお願いしますと回答しました。ここではまだ数組いる候補里親の一組でしかなく、また待つ時間に入りました。我が家は猫がおりましたので、里子さんに猫アレルギーがあった場合が心配でした。

晴れて我が家がデンデンの里親に決まり、デンデンの写真を数枚いただいたときはわくわくしました。にこにこ走っている様子やおやつを食べている写真を毎日眺めて過ごしました。この子がうちに来るんだなと私はうれしくて仕方がなかったです。

面会をしたときは、写真より小さくて、はかないくらい色白で、どう抱っこしていいのかもちょっと戸惑いました。乳児院の担当の保育士さんが片腕でデンデンを抱っこしながらほかの作業をしている様子が、私には二人の関係性の強さが見えました。生まれてから２年間、この保育士さんが彼の愛着の人なんだなと知りました。私たちと保育士さんが仲よくしている様子を彼が見ることで、私たちへも彼の信頼が広がっていくんだと担当相談員の方や心理司の方にアドバイスをいただきました。施設の皆さんに協力いただき、なおかつデンデン自身が人懐っこい子で、初対面から自宅へのトライアルまで３か月、特に拒否されることもなく、お互い関係を築いていけました。それは実ママさんのおかげでもあるなと、私は感じています。デンデンの生みの母親である実ママさんは毎週欠かさず乳児院に面会に来ていたそうで、デンデンも毎週、僕だけに会うために来てくれているママだと認識していたんだろうなと私は思いました。

お会いしたことはないですが、ママありがとうと私は日々感謝していました。事情があり、自分で育てることはできないが、施設ではなく、この子のために里親へ託そうと決断したママの大きな愛にも、私は共感しています。

里親交流が始まってからは、デンデンが混乱するといけないので、実ママさんとの面会はストップになりました。そして、今も再開はできていません。子供の安定と実ママさん

の安定、今がベストだと専門職の皆さんが決めたときに、デンデンと実ママさんの面会は再開できるそうです。実ママさんとの面会交流が再開した後は、彼にどんな変化があるのか、私たちには予想がつきません。彼の利益になる養育を一番に考えて、彼の心が大きく揺れてもしっかり受け止めていこうと覚悟しています。デンデンには、ママとオカサと二人もいてすごくラッキーなことなんだよと教えながら育てていくつもりです。

うちは、デンデンの苗字は私たちのものにはせず、本名で育てています。彼のこれから始まる人生キャリアが滞ることなく、洋洋と流れますようにと思いを込めて、本名を選択しました。

【里母】

初めて我が家にデンデンが遊びに来ることになったときは、いつもと違う雰囲気を察したようで、玄関から入ろうとはしませんでした。あっち行くと道のほうを指して、だっこのまま３人で近所を歩きました。今日はいつ家の中に入れるんだろうかと戸惑っていたところで、道の向こうからもこもこの白いファーがついたダウンのフードを頭にすっぽりかぶった小さいおばさんが歩いてきました。それを見たデンデンがオカサにしがみつきながら、蚊の鳴くような声で「メエー、メエー」と言ったんです。羊だと思ったようで、それがかわいくて、おかしくて、緊張している割にこの子は周りがよく見えている、余裕もあるんだなと感じました。笑っている私たちを見て、デンデンも緊張がほぐれたのか、和やかな雰囲気でUターンして、家の中に入ることができました。羊のおばさん、ありがとうという感じでした。

今ではすっかり生活に慣れて、自宅の全てが当たり前の風景に彼の中で変化してくれて、普通に過ごしております。子供は吸収が早いなと実感しています。

日帰り外出、一泊外泊、二泊三日と週末のたびに試みていき、最終段階の１か月トライアルの期間は、私が仕事を休んでデンデンと過ごしました。オトサも在宅ワークでしたので、かなり関われました。二人で見られたことが大きかったと思います。両方に彼がなじんでくれて、私もオトサに見てもらっていて、美容院に行ったり、歯医者に行ったりもしました。お互い融通しながら自宅での生活を慣らすことができました。

近所のみんなにデンデンを紹介すると、皆さん、彼のかわいさにメロメロで、とてもかわいがってくれました。お下がりをいただいたり、お家に上げてもらったり、一緒に犬の散歩をさせてもらったりと、近所でも顔なじみのデンデンになっていきました。

【里母】

３月に正式受託になってからは、本当に日々変わっていく、成長していくデンデンと私たちに充実感を覚えるばかりでした。彼は身長が１０センチ伸びました。９月の後半からは、語彙が各段に増えました。思わぬ発言があったりしました。私たち夫婦の関係性や家族の在り様も変わり、地域の方々にも里親や里子について、少し身近になったのではないかと感じています。夫婦でもめることも多いですが、結局、彼も私たちも成長しており、一時的な悩みであり、時とともに変化したり解消していくと実感しています。

【里父】

今は３歳で小さくてかわいい盛りですが、デンデンも反抗期がこれからあると思いますし、体もオカサよりも大きくなり、私たちが体力的にも精神的にもしんどくなるときがあるかなと予想はしています。

私の両親は、男二人を育てた先輩なので、話を聞いてもらおうと、私は当てにしています。

【里母】

里親に興味があって、今日お越しになっている方は、早速最初の一歩を踏み出してほしいなと思っています。やってみたいならば、逡巡せず始めてみて、困難があれば周りに助けを求めながら、試行錯誤で続けていけばよいと私は今も思っています。

あの子が成人する頃には、私たちは６０を優に超えますが、関係機関の専門職の方、里親仲間の方たち、地域の人、職場の仲間等が、こちらから言い出しさえすれば助けてくれますので、私は心身ともに健康なまま、とにかく愛情をかけてこの社会的養護を全うしたいです。彼とお酒が飲める日、オトサは一緒にサッカーができる日を夢見て、これからどんな青年に成長するのか、本当に楽しみです。待ち遠しいです。

１４「あるがままを、そのまま受け入れて」

発表者：里親（７０代女性）

家族構成：里親、元委託児童（自立）

里親歴：３７年

里親登録は昭和です。今年で３７年目に入りました。

実は、私たちは子供ができませんでした。不妊治療を長くやりました。でも、できなくて、どうしようかと思っているときに、主人の両親から「子供がいなければ子育ての苦しみはないけど、楽しみもないよ。だから里親をやってみたら。」と言われました。私、怖くてね。自分の子じゃない子を育てるというのが怖くて、実は占いの先生に見てもらいましたら、「あなたたちの足りない星をこの子が持っていて、この子の足りない星をあなたたちが持っている。だから大丈夫よ。」と。要は誰かに背中をポンと押してもらいたかったんです。それで、やってみようかなと思いました。

里親になる前に、ある方から「子育ては子供を育てていると、子供が何か悪さをしたときに、自分の子供の頃こんなことをしたなという思い出がある。でも里子ちゃんだと、そういうのがないから、そこが辛いよ。」と言われました。

彼女は３歳でたった一人で我家に来ました。お風呂に入るとお風呂の桶を一生懸命に洗って出るんです。施設ってすごいな、こんなにしつけてくれるんだと思っていました。でも、彼女は彼女なりに私たちに好かれようと一生懸命だったんです。小さな３歳の子が。だから一生懸命やったんです。でも、長続きしませんよね。あれが欲しい、これが欲しい、と言われてもにわかママはあれ、これが分からないんです。「何？、何？。」と二、三回聞いて、３歳の子が答えられますか。もう分からなくなって、あーってなって怒ります。ちょうど１か月頃、赤ちゃん返りという頃です。分からなくて、あーってなって、椅子をバンバン倒したり、あーって泣いて泣いて。

主人と大人二人だけの生活は本当に穏やかだったので、あの頃に戻りたい、この子さえいなければ戻れると、だんだん、だんだんそう思うようになってきました。

そして、寝かしつける時に、絵本を読んで、子守唄をして、この子の顔に毛布をかけてちょっと手をやれば、楽になるかなって思ってしまったんです。ふと気がついて、明日新聞に載ると思ったら手を引っ込めました。そのときに、すごく自分の中に“夜叉”がいる。怖くて、怖くて、それを主人に話しました。そうしましたら、「おまえはよくやっている、よくやっているからこうなるんだ。追い詰められているんだよ、頑張り過ぎているんだよ。

いいじゃないの、良い加減で。良い塩梅でいいよ。別に食べ物なんて、どうでもいいよ。」って言ってくれました。そして、同じ敷地内の隣に住んでいた主人の両親にそのことを話しました。そうしたら、「いいわよ。じゃあ、疲れたら子供を母屋によこしなさい。あなたはその間、昼寝しなさい。」って言ってくれました。彼女は母屋に行って何をするかは、こたつに入って、水戸黄門を見て、おみかんとお煎餅を食べて、そんな生活をしていました。本当にそのときに、近くに助けてくれる人がいて良かったと思いました。

主人とそれからは毎晩、今日の様子を話し合うようにしました。主人が「人はみんな十月十日、おなかに子供を育んで、そして産みの苦しみがある。だから、取りあえず十月十日やってみようよ、それが産みの苦しみだと思ってやってみようよ。」そして、主人の両親もそのように協力してくれました。それが本当に助かりました。

私たちは子供に対してどうやっていこうか、まず第一に愛情表現をしよう。普通の家庭だったら、普通にしていれば愛情は分かるかもしれない、でもこの子たちはそれを感じていないんだから、態度では分からない。分かりそうなものなのにというのはない、だから口に出して言おうと。そして毎晩、だっこして大好きよとぎゅーってして、大好き大好きって言いました。このアドバイスをくださったのはその子がいた施設の園長先生ご夫婦、それから里親の先輩の皆さんに相談したから、そういうことができました。

ただ、大好き大好きというのは、一つだけ気をつけてください。中学生ぐらいになった女の子にすると、今はセクハラと言われます。お姉ちゃんも小学校高学年になったときに、「お母さん、やめてくれない。私それ、拷問なんだけど。」って言われました。

それから、うちの主人はほとんど普段は怒りません。だから、何かいろいろ娘がやっても子供の前では怒らないで、私のところにあれはどうなんだ、こうなんだと愚痴を言ってきたりします。娘が帰ってくると「どうだった、寒くなかったか。」、いいとこ取りです。だから娘は、「お母さん。私、お父さんと結婚するからお母さんはほかの人と結婚して。」。それから、絵本を読んでいたら、絵本のお父さんがおひげがありました。「うちのお父さんはどうしておひげがないの。」って言われて、それからひげを生やして、今も生やしています。そんなふうに暮らしていました。とにかく、大好き大好きというふうに言っていました。

皆さん、ちょっと考えてみてください。普通って何だろう。普通の家庭って何だろう。でも、その子たちは今まで施設にいたりとか、一時保護所にいたりとか、いろいろな所にいます。普通というのは自分が体験したり、それから見聞きしたことが身について、それ

が普通だと思います。この子たちは親と一緒にいなかったり、いろいろな事情があって、背景がある子たちです。私が夕飯の支度をしていると彼女が「お母さん、ご飯なんて持って来ればいいじゃない。」、それは施設には調理室があって、そこから食事を持ってきます。それから、大皿におかずを盛ったら、そこからおかずが取れませんでした。施設はみんな一人に一つずつ、ちゃんとあります。それから、私が病気で寝ていても、何で寝ているのというふうな顔をします。だって、施設の大人はみんな元気な人が働きに来ます。病気の人は施設とかに、感染するから来ません。お父さんがアルコールを飲んで、寝っ転がりながらサッカーとか野球とか、テレビを見ることもありません。みんな、一生懸命、その子供たちのために働いています。そういうのを見ていなければ、子供たちは分かりません。だから、ちょっと子供の目線で見てあげてください。みんな、その子たちは事情があって、背景があって、今ここにいるんです。だから、子供に想像しろというのは無理です。大人が想像して、考えてあげてください。

本当に追い詰められたときに何かが起こると思います。それは紙一重だと思います。その一線を超すか越さないかは本当に大きな違いです。それには皆さん、周りの方たちに何かあったら、助けてって言えば誰かが助けてくれます。施設の職員さんであったり、児童相談所であったり、それから区の、子ども家庭支援センターとかいろいろな方。

そして、何よりも里親も里子にもとって大きな力は、同じ仲間です。例えば、「うちの子、こうなのよね。」って愚痴を言っても、同じ里親同士だったら同じような経験をしていますから分かります。そうそう、我家もこうだった。

それから、里子ちゃんたちにとっても、小さいうちはいろいろ分かりませんけど、今の時代、２分の１成人式とか、生い立ちの記録とか学校でやります。その頃に、他の子供達と、ちょっと違うなって子供たちが気づきます。そして、やっぱり何だろう？というのがあります。うちのお姉さんも高校のとき、居場所探しで荒れました。自分が、この家にいていいのかどうかと悩み荒れたようです。それには特効薬はありません。日常を淡々と暮らすことのその積み重ねで答えが出てくるだけなんです。いい子に育てようとか、そんなのはいりません。あるがままを、そのまま受け入れてあげていただければと思います。

一時保護の子供たちもたくさんいます。一時保護所は保護所にいる間は学校に行けないんですよ。だから、おうちにいろいろな事情で帰れなくて、でも学校へ行きたいという子を預かったり、せっかく高校へ入ったんだけど保護所にいると入学式も学校にも行けないという子を預かったり、それから夏休みの学校行事で合宿に行きたいからって預かったり。

それと不登校でずっといたけど、学校へまた行きたいというような子を預かったりしています。今の子たちは携帯とかそういうのは当たり前、私にはついていけません。そんなとまどいがいろいろあります。でも、必要なのは安心安全で、この場所で寝られて食事ができること、それが里親の大事なことだと思います。そして、あなたはそのままでもいいんだよ、あなたをそのままを受け入れるよ、自己肯定感を持てるように見てあげてください。

預かった子どもの言葉を伝えます。「思春期には里子であろうが、里子でなかろうが皆悩みます。悩みもがきます。そのときに当たるのは、親にしか当たれません。だから里親は、我慢のしどころです。でも、愛情表現をしてください。それは、私が帰ったときに暖かい部屋があって、お風呂が沸いていて、ご飯が食べられて、安心して寝られることです。」、そう言いました。そうだと思います。やっぱり子供は安心できる場所があることが、一番だと思います。

世の中には、社会には、赤ちゃんがいて、お年寄りがいて、障害のある方がいて、そして里親子がいて当たり前の世の中になってほしいと思います。自然界だって、親が何かで育てられないときは誰かが代わりに育てています。それと同じことです。そして、助けてほしい時は助けてと言っていただきたいと思います。そうすれば、みんな誰かが何かで助けてくれます。閉じ籠ってしまった時には、何も助けがありません。ですから、里親同士の仲間の交流、里子ちゃん同士の仲間も交流、里子ちゃんが悩んだ時に相談できるのは同じ里子ちゃん同士です。同じように悩めることが一番だと思います。

向き合ってくれる人がいる、愛されたと実感した人は大丈夫だと思います。ちゃんと生きていけると思います。その実感をずっと続けていけることが、長く続けていけることが大事だと思います。

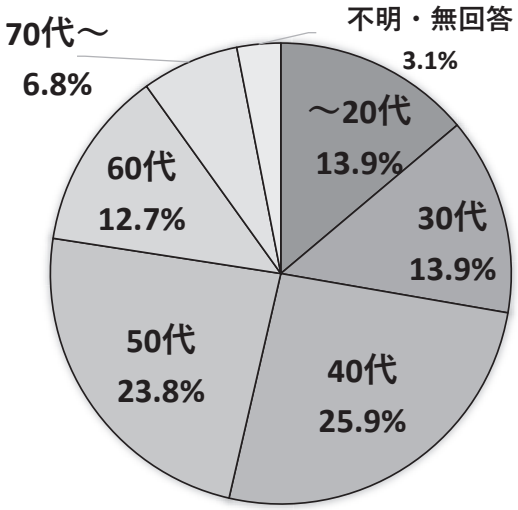
主人がここのところ言います。「俺は名優だよな。」、心で何を思っているのか。例え違う考えでもちゃんと協働してくれます。じゃあ、私だって女優だよね、この人とこんなことするんじゃなかったと思っても、でも今まで何とか一緒にやっています。皆さんもどうぞ、お仲間になってください。

体験発表会アンケート結果

全回答 N=1,565

1．体験発表会参加者について

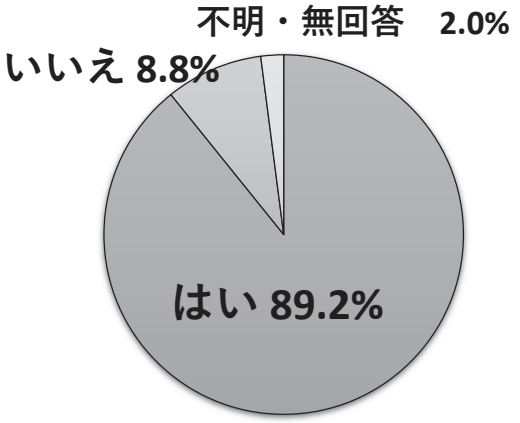
（１）年齢構成



（２）所属 （一部複数回答有） （単位：人）

一般	523
民生児童委員	115
主任児童委員	40
養育家庭（里親）	120
養子縁組里親	18
ﾌﾚﾝﾄﾞﾎｰﾑ	17
都職員	89
区市町村職員	187
施設・関係団体職員	206
学生	94
その他	102
不明・無回答	56

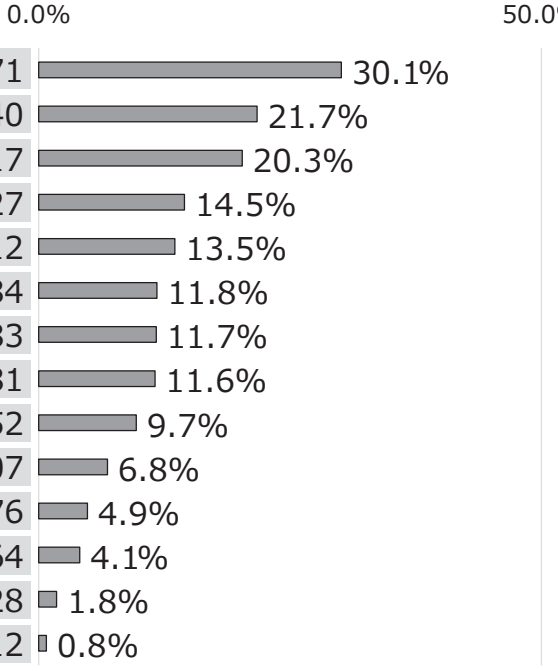
2．養育家庭制度を知っていましたか？



3．養育家庭制度を知った経緯

（複数回答可）

（単位：人）

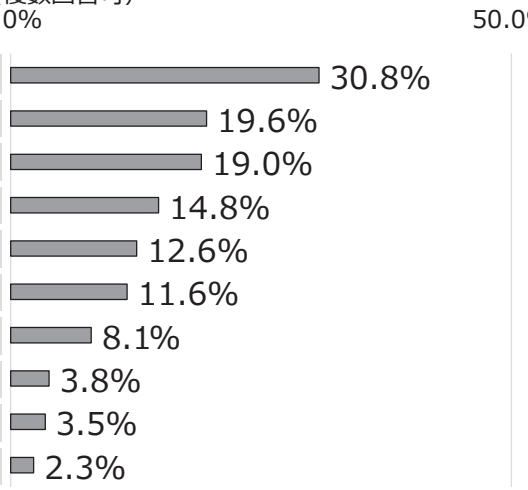


児相・子ども家庭支援センター	471	30.1%
行政による広報誌・HP	340	21.7%
インターネット・ＳＮＳ	317	20.3%
児童福祉施設	227	14.5%
ポスター	212	13.5%
その他	184	11.8%
テレビ番組	183	11.7%
知人・友人	181	11.6%
大学・行政機関が開催する公開講座等	152	9.7%
新聞・雑誌	107	6.8%
不明・無回答	76	4.9%
図書	64	4.1%
テレビCM	28	1.8%
ラジオ	12	0.8%

４．どこで、体験発表会を知りましたか？（複数回答可）

（単位：人）

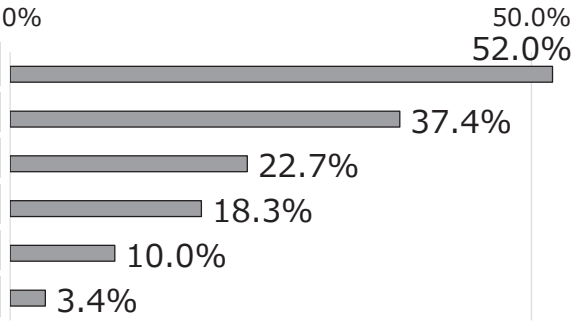
体験発表会チラシ	482	30.8%
区報・市報	306	19.6%
その他	298	19.0%
ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ・HP・ＳＮＳ	231	14.8%
知人に勧められて	197	12.6%
過去に参加	182	11.6%
ポスター	126	8.1%
広報東京都	60	3.8%
不明・無回答	54	3.5%
行政機関への問合せ	36	2.3%



５．今日の体験発表会に参加した動機をお聞かせください。（複数回答可）

（単位：人）

養育家庭制度に興味・関心があったから	814	52.0%
仕事や学問などの参考にするため	585	37.4%
子育てに関わる話が聞けると思ったから	356	22.7%
養育家庭になりたいと思っていたから	287	18.3%
その他	157	10.0%
不明・無回答	53	3.4%



６．体験発表会の感想をお聞かせください。

社会的な状況の中で里親が求められていることが分かり、参考になりました。私の場合、パートナーが興味があり、私は特に理解していない状態で参加したので、理解が深まって良かったです。実子の子育てと変わらない面も多いこと、一方で独自の悩みもあることが分かりました。（30代、一般）

恵まれないお子さんに温かい家庭の経験を味わってもらいたいなあ、と思う気持ちが大きかったので養育家庭に興味がありました。ただ、年齢的に高齢なのでその点が一番不安がありましたが、様々な形の養育家庭があると知り勇気が出ました。（60代一般）

枠組みやシステムは調べればある程度分かりますが、今日のような体験者の生の声はなかなか聞けないので、大変貴重な機会となりました。質疑応答ができるのもとてもよかったです。より立体的に里親を検討することができるようになりました。（40代一般）

養育里親となり、里子を育ててみての苦労やほっこりしたエピソードがとてもリアルに伝わり興味深かったです。親族だけでなく、近所や職場の人たちにも周知してもらうことの大切さを知れて良かったです。（50代施設・関係団体職員）

ご参加いただきまして、ありがとうございました！

東京都における普及啓発の取組み

■「Tokyo 里親ナビ」

里親とそこで暮らす子供の様子を紹介するホームページです。

都の里親さんのインタビューなどを掲載するほか、里親に関するイベント情報も掲載していますので、ぜひご覧ください。

https://tokyo-satooyanavi.com/

二次元コード

■「東京都里親制度 PR 動画」

里親制度を広く周知するため、動画を作成しています。

「さとぺん・ファミリー」と、児童養護施設出身のモデル・田中麗華さんが登場し、里親制度について解説する内容となっています。

https://tokyodouga.jp/65g0qxhcpga.html

二次元コード

養育家庭（里親）は、様々な理由で親と一緒に暮らすことのできない子供たちを、養子縁組を目的としないで、家庭に迎え一緒に生活し、養育していただく制度です。

【養育家庭（里親）を、詳しく知りたい。】

◆養育家庭（里親）になるにはどのような資格が必要ですか？

○ 都内在住の夫婦（※）で健康な方

配偶者がいない場合は、子供を適切に養育できると認められ、かつ起居を共にし、里親の養育支援者として子供の養育に関わることができる、20 歳以上の親族等がいること。ただし、子供を適切に養育できると認められる特段の事情があるときはこの限りではありません。

○ 申請者の家庭及び住居の環境が、家族の構成に応じた適切な環境が必要です。

※ 事実上婚姻関係と同様の事情にある方や、同姓パートナーも含みます。

◆どのような子供を預かるの？

○ 親の病気や虐待等の理由で、親と一緒に暮らすことができない、おおむね 18 歳までの子供です。

◆預かる期間はどれくらいですか？

○ 養育期間は数年にわたる場合もあれば、数か月の場合もあります。

○ 短期間（おおむね１か月以上２か月未満）のみ預かる養育家庭もあります。

◆養育に係る費用は支払われるの？

○ 子供の年齢に応じて、生活費や教育費等が支給されます。

○ 養育家庭（里親）には手当が支払われます。

◆養育に必要な支援はどのようなものがありますか？

○ 児童相談所が中心となって関係機関と共に支援を行います。

○ 里親自身の休息が必要な場合には、子供の養育から一時的に離れて休息できる制度があります。

○ 里親同士が集う相互交流の機会があります。

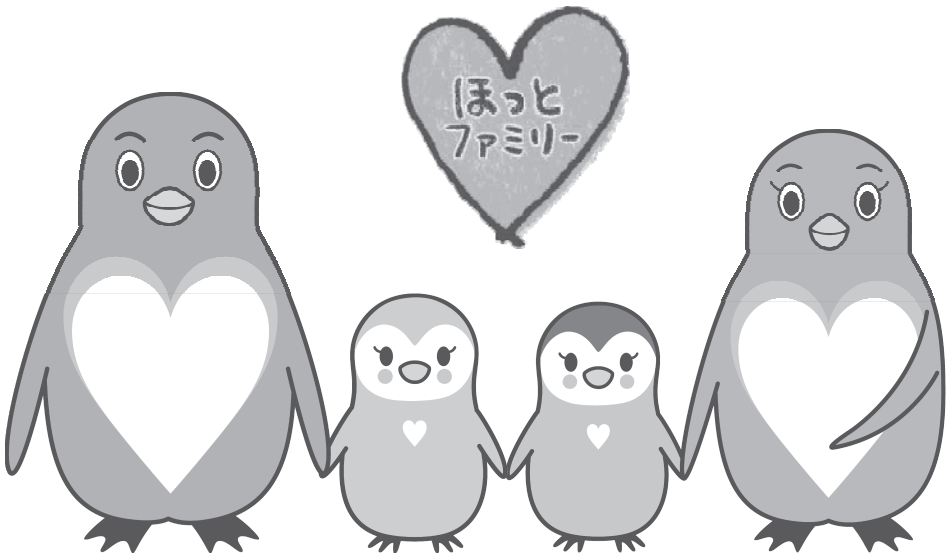
○ 経験豊富な里親が電話等で相談に応じます。

○ 研修などに参加し、養育に必要な知識を学ぶことができます。

【養育家庭制度に関するお問合せ先】
東京都福祉局子供・子育て支援部育成支援課里親担当
〒163-8001 新宿区西新宿二丁目８番１号
電話 ０３－５３２０－４１３５

memo

ほっとファミリーは養育家庭の愛称です。



Tokyo 里親ナビ
―子どもと里親の暮らしを知るサイト―
https://tokyo-satooyanavi.com/

里親ナビ

養育家庭（里親）体験発表集
令和6年9月発行

登 録 番 号 （6） 65

発　行　東京都福祉局子供・子育て支援部育成支援課
東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話03（5320）4135　ﾌｧｸｼﾐﾘ03（5388）1406

印刷所　東京都同胞援護会事業局
東京都墨田区両国四丁目1番8号
電話03（5669）0261

R70
古紙配合率70%再生紙を使用しています
石油系溶剤を含まないインキを使用しています

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。